

436
194



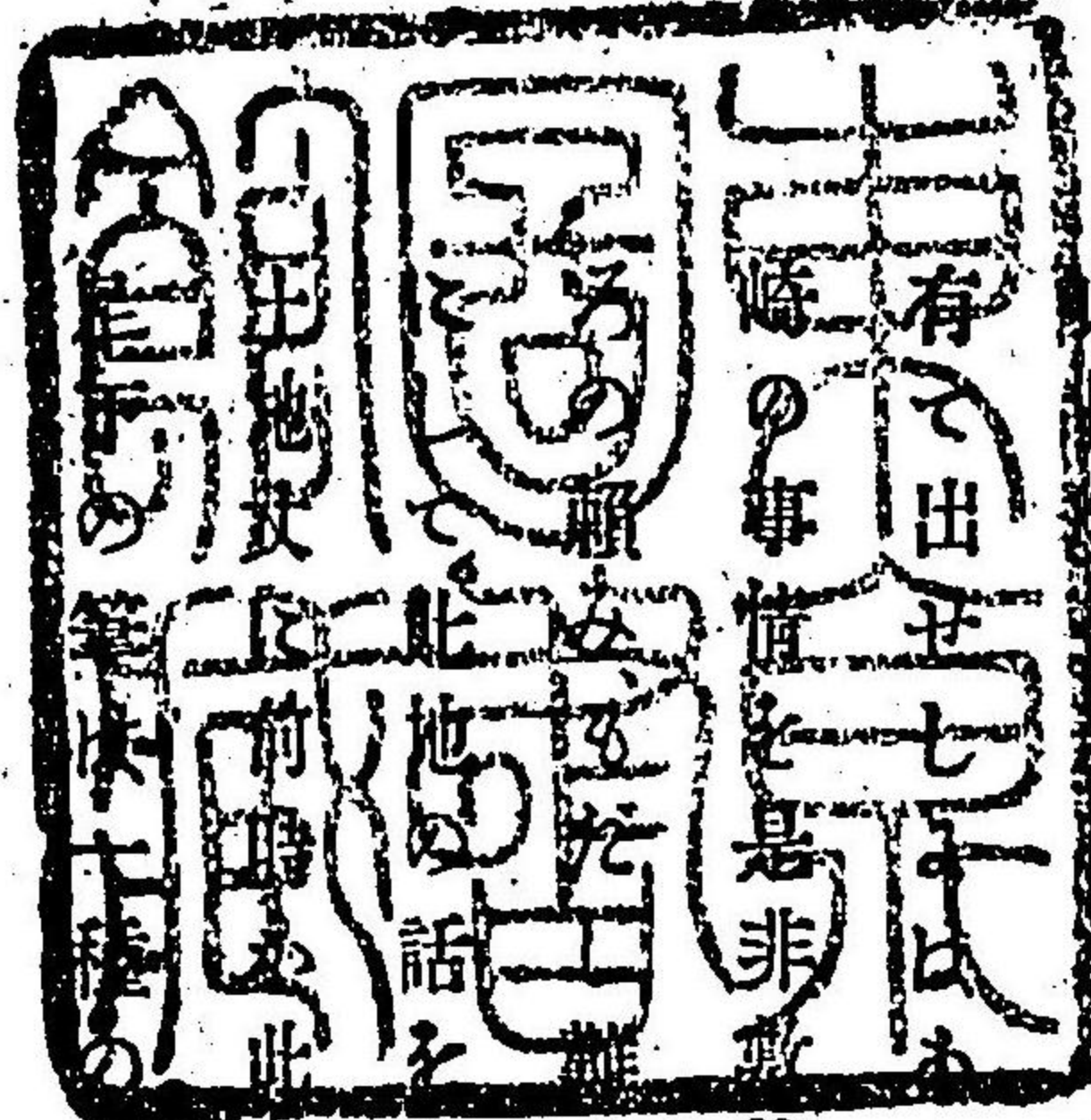
新長崎華文

増補
再版

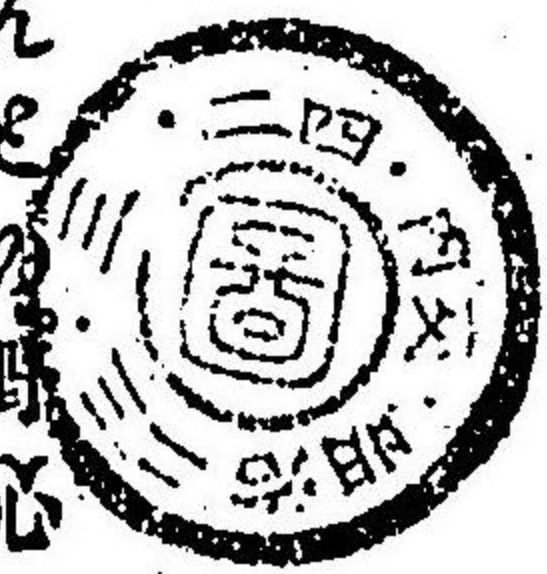
不

特20
182

№1921/23



初版序



此長崎土産(前)の煙草天草の海膽と競争して天晴れ販路を廣めんと欲し、
 有て出せば、事元ひまで日のくらし方に困る様を見込まれ、長
 崎の事情を是非敢て書いて呉れ、國許へ見せて喜ばせ度からと、二三友人が懇
 懇と氣任せ、書なぐり、何時となく組立てたる、此書の骨
 格、地味話、遠方へする、其口上の一才代理を務めた丈の事なるが、狭い
 田舎に、前此事を傳聞せる人のふれて、見ぬくせ、褒め倒し、實に旨ま、
 機軸がある。田舎は愚か、東京もめづらしいぞ。寶を深山に
 埋めるも惜しいもの。どふです此れを出版してはと、そろ／＼油をかけられて。
 始めの程は、ナンノ、一時のいたづらでと、濟まして居りしも、濟まぬ、吹き來る
 煽動風。中も宮代氏など云ふ、殊更の扇持、骨さへ出來れば跡、易し。肉を附
 け、皮をかぶせて、刷て見給へ。所望の者がうるさい程有る。ナ、印刷一切は僕が

引受けるからさど。二の句を繼^つがせぬあほり方。終^る瓢^たんから飛び出させた
 駒の背。今來の大學者が、腰をすゑ膳の箸を取れる次第なり。
 去れば有りの儘に書いた丈が。此書の面目よしして。色も無ければ。艶も無し。穿つ
 の何のど云ふ様な大望の。有ても出來ず。無ければ。猶更出來。かたく出た處もあ
 り。柔かな點も有り。雑多な亂文。御容捨が出來ても。出來なくても。其れも一向か
 まい不申。先つ^り數百里隔つる故郷の空母と云ふ。子よ^り馬鹿者。此書の成るを
 打見なば。さぞや心よ喜ばん。こんを詰めるが毒故よ。手紙も長く^り書くなど曰
 ひ置けど。行て居る土地の様子丈も。知り度^り如何ばかりぞ。今^の悴も本さへ書
 く程よ。元氣の附しが。オーうれしや。見事なものと。滿面の笑に込る。情と愛。見ぬ
 先から見た様で。今から樂よする位が。意氣地ない病仙の一得のみ。
 題號の元來長崎土産と夫子自身の撰定せし。中途に古本屋で同名の古本を
 拾ひ出し。讀んで見れば。弘化頃の出版よて。書中の記事の。當時よ珍らしかりし。

唐人蘭人の有様を重もよ寫せしものよて。文章も餘り妙ならず。今日の土産よ
 り。勿論なり難けれど。同名異物の斯く歴然と存在して。迷惑故。夫子の大作よ
 り。新々の二字を冠する事となせるが。古本ながら。聖靈祭の一段の。頗る細密よ
 敘しても有り。且つ今昔の感をひき起さしむる種よもと思ひ。扱^りぬき書して
 讀者の一察よ供しぬ。

本篇記する所の古事來歴等。一切據り處無しの手細工よ^り非ず。古來の諸記録
 及び二三有識の古老。特よ逸道人なる博聞家の賜なれ^り。特よ之を巻端に表す
 と云爾。

崎陽隱士 喫霞病仙



再版序

四

繁昌を千歳ふ近以鶴の港。愛夜はやさしくを。氣が長
崎の土地氣質は。丁度長者が家乃羅祭り。餘情をたつ
ぶりあんだ離の、昔七かふ今三か。うるさき電録世界
の當世ふを、又と類かた今桃源。其仙樂の幾かを、一巻
は中へ詰め込んで。度く衆生を利益せん、善乃方便の
長崎ふを器を。新くと名の附くまふ。あけて嬉れしよ
玉の文字。見ぬげ恥、取らぬを損と。人氣を忽ち病仙と

有頂天上。俄名聞の素天邊ふ推の任せ。桃花流るゝ、細
溪川の口をらで。瀬戸の入口をを打越して。遠く上方
関東のそこまゝより。猿狗手後れの方へ、我れくくと
縁だり来る者。日ふ衆人の數を知らず。本を本を、
西より東より。是非再版して、天下の爲めを爲て呉れ
と申出で。活版をを活版を、甲乙を。増刷せ縁は、學
者の義理が濟ままいと謎と掛け。如何と煩々しき
ふ證方なく。人拂ひの手段ばかりふ。増補訂正、紙數を
倍ふして、再版の手續を運び。終ふ世間賣出勝手次第

五

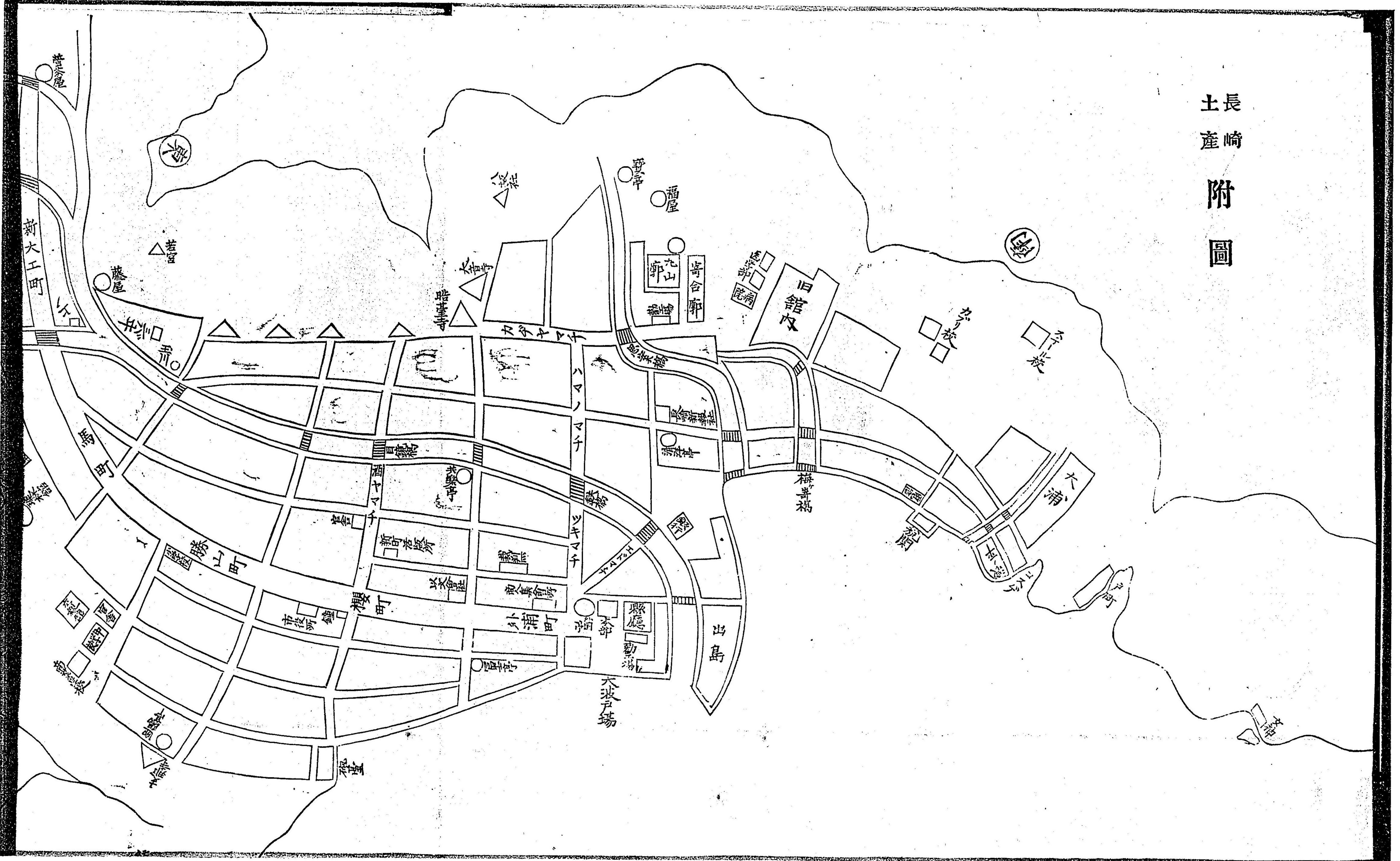
六
の思余と書林に下すふ至れるが。叔。結構な土地なら、
結構な點々と書き綴れば。其れでよんで御座らぬ
か。又點の不足のと、いらぬ他人の詮議は頭痛ふ病を
からこそ。罰が當つて。酒は飲めぬ、病仙の境遇を脱し
得ぬで御座るを。天狗の鼻、一寸や二寸の折ひしき
を。病仙最初より覚悟の筋をも。胃の底ふキラ附く、
一片の虫。桃源の郷ふ入て、守る郷ふ後ひ難く。面白
い中ふも。千ヨビリく、目醒しの針とさした筈之れ
を。吾くせ、吾病。命がほし。名が惜し。天地か天下か、

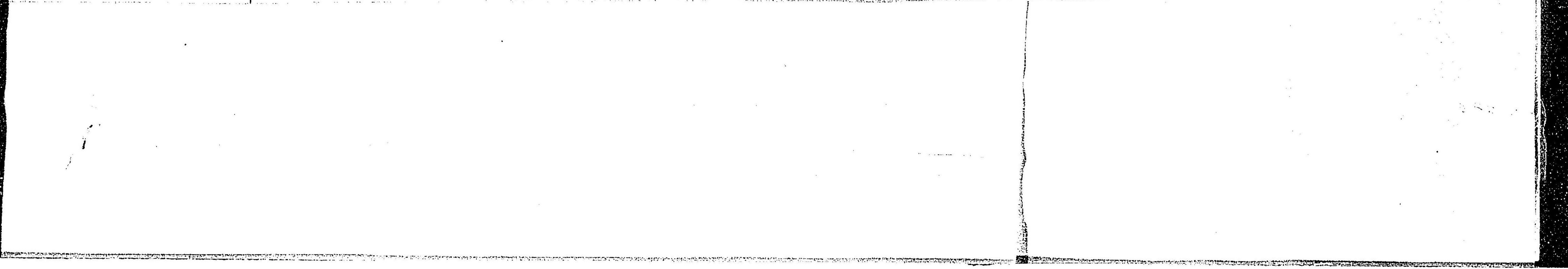
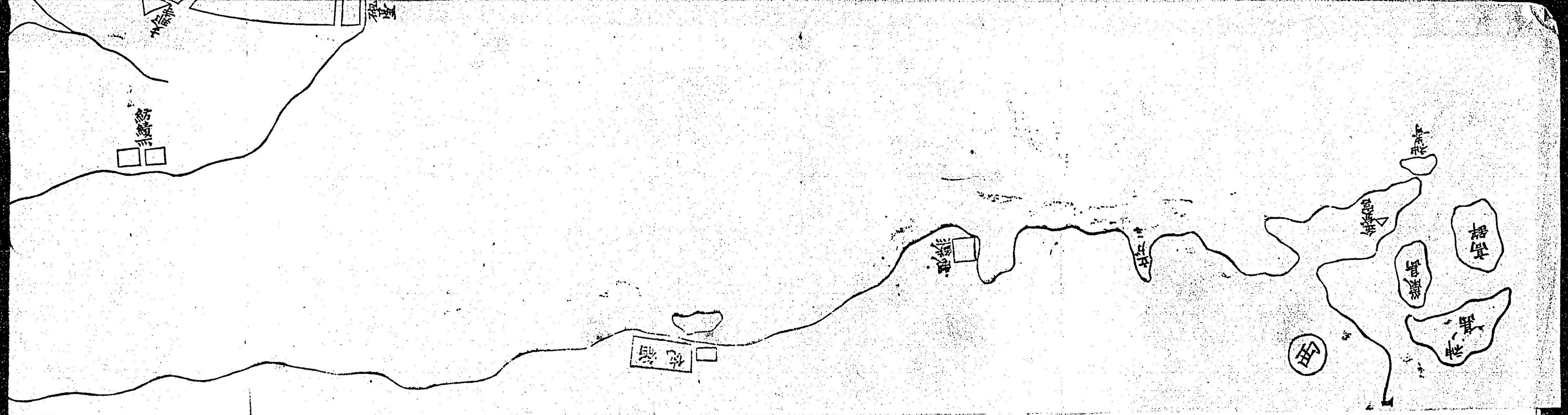
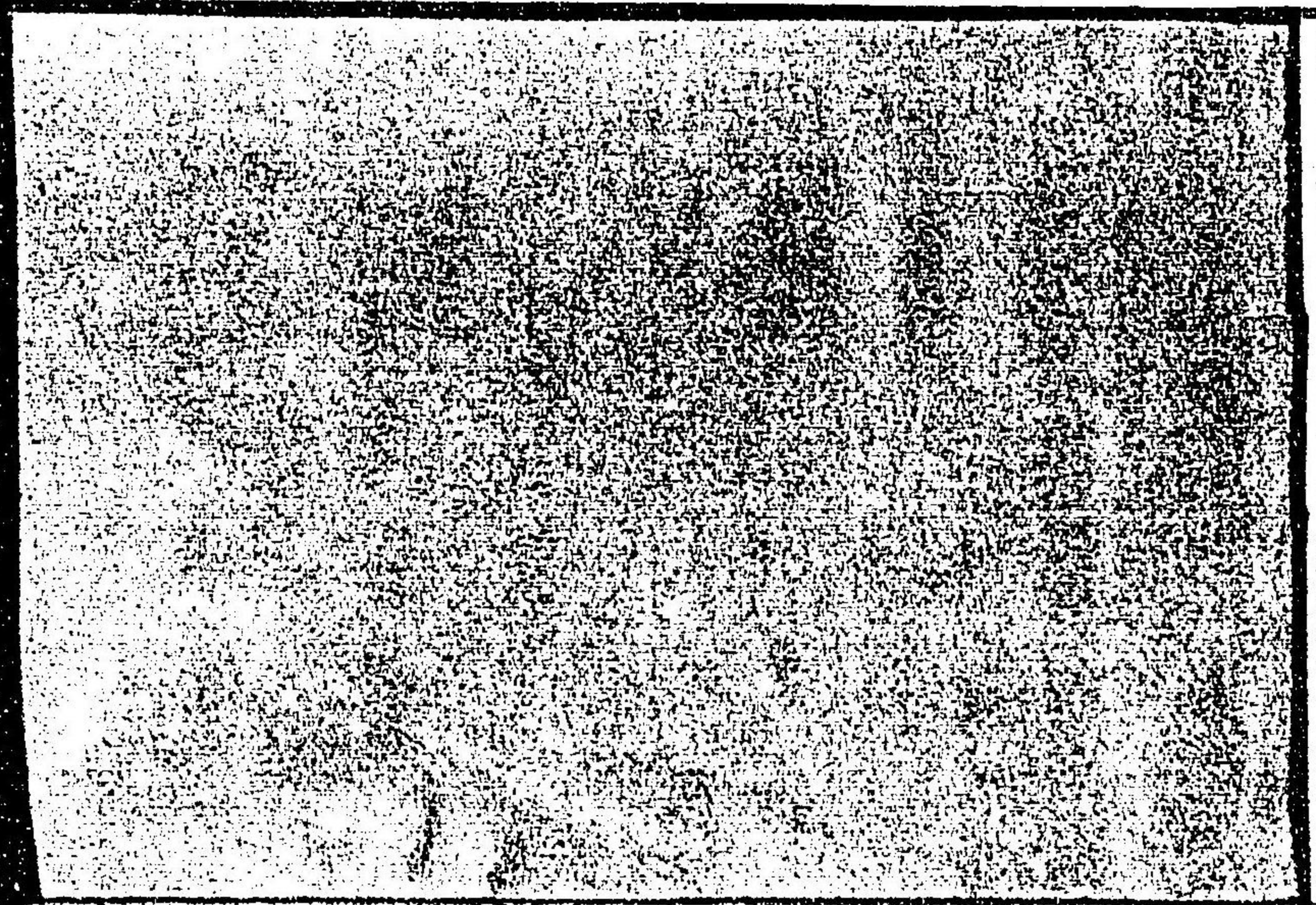
何れか。一點求むる所有りと云ふ。嫌をどうせ免か
れ得ざる。夫子の之と求むるは。其れ人の之と求む
るふ異なる有る歟と。問をぞ語りの高慢文句。其ま
筆してけし書み代ふ。

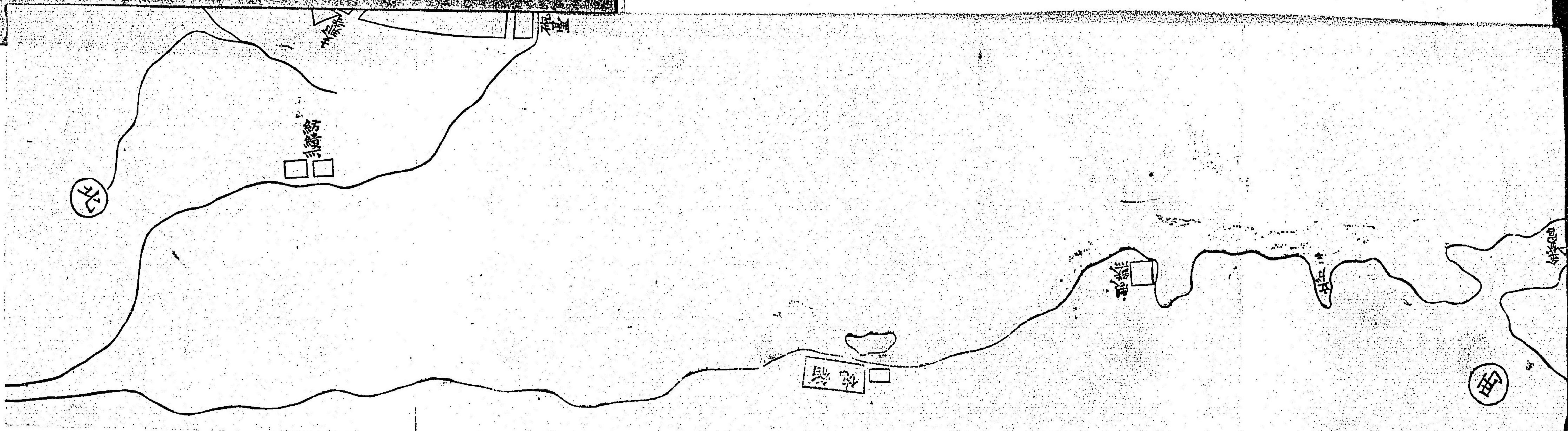
政治観音の縁日廿三年
憲法如來の第一週年日

喫霞病仙

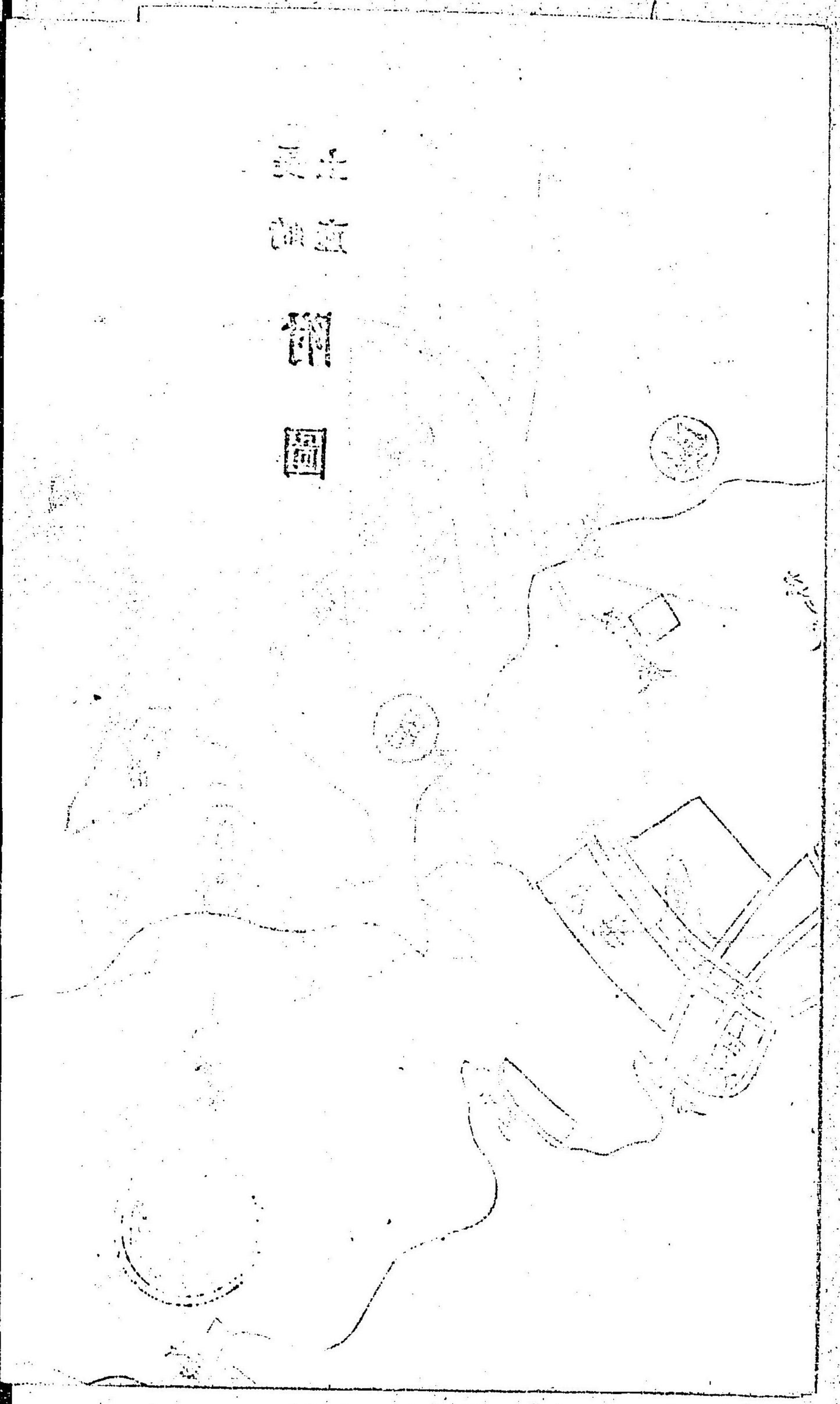
長崎土產附圖



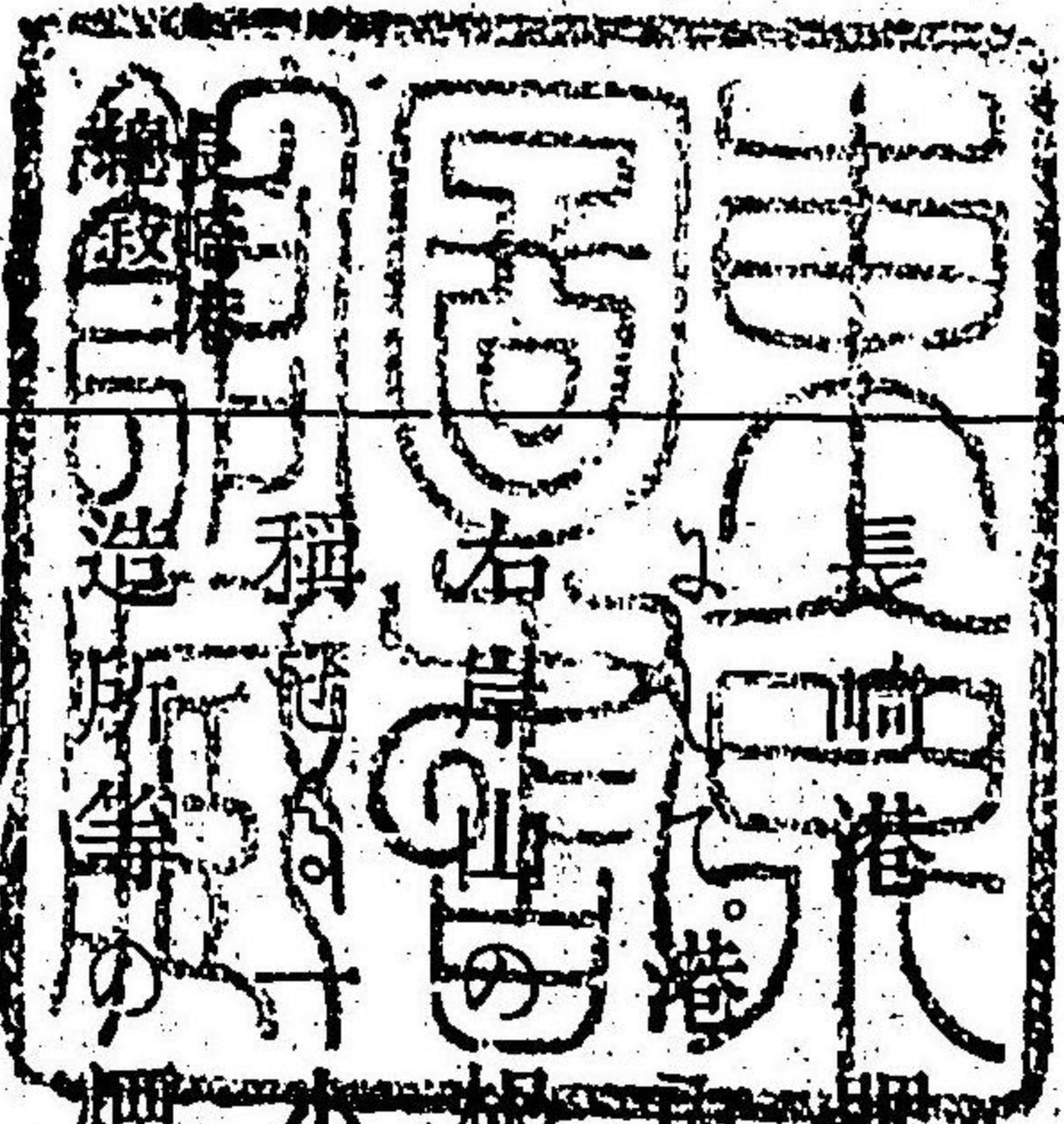




長崎新地
圖



新々
長崎土産



肥前よ在り。西南海よ面して開けたる細長き入江。港内水深く大船の岸邊まで出入し得可し。港よ入て右岸山の根よ添ふて長崎市街を成す。左岸の方ハ稻佐郷と稱す。小村落よして三菱造船所を始め製氷會社煉瓦製造所等の煙突を望むのみ。市街の取着ハ浪の平町と稱し。安妓樓有り。軍艦水夫等の得意なる保養場なり。其次ハ大浦居留地よして。各國商館領事館等有り。白塗赤煉瓦中々立派なり。大浦の次ハ新地。此處も矢張居留地よして。支那人多し。新



石塔が
名物

地の傍が出島、大波戸場、出島を越ゆれば江戸町、外浦町。其れからエナヤ、純粹の長崎市街の家續き。一方ハ勿論海一面せど、他の三方ハ一切山なり。山の高い所ハ何方を向ても、お寺の共進會よして、塔の金碧閣の赤白。其が上よ墓所石塔の行列。是れが長崎一の名物なり。お寺の下の方から市街なる。市街の家ハ大概瓦葺きなり。東京や大坂の如く、煉瓦や煙突や三階等ハ見ぬ。屋並の揃ふた工合、山の景色、海の帆檣、中々よ奇麗なり。夜よ成て港内の船、市中の樓よ、燈の附いたる鹽梅ハ日本一の好景ぞと。去る港通の言ひしも、理り無きよあらず。

長崎往古深津江福富浦等の稱有り。又瓊浦と曰ふ。今日猶存

鶴の港

する別名ハ鶴の港なり。貞應の其昔、長崎小太郎が此地を領せし頃より、長崎の名稱有りしと云ふ。長崎氏ハ十三代續きて、甚左衛門純景よ至りて、領地を沒收せられ。其れより長崎ハ大村藩よ歸せしが、領主大村理專、南蠻人の請を容れて、元龜二年始めて市街を設け、彼我の貿易を許してより、移住する者次第よ多く、寛永十二年、唐船貿易を長崎一港よ制定し、後五年、蘭船貿易を此地よ限るよ至て、益繁榮を擅よせるが、嘉永安政以降、横濱兵庫等の開港よ及んで、此地の緊要の度漸く減するよ從ひ、漸く衰微よ趣き。今ハ早筑前博多よも如かざる有様となれり。去れど日本唯一の互市場として、唐船蘭人を相手よ、寶の只取りせし、黄金時代の過去りしとい。

歴史

現況

云へ。流石ハ五港の一丈有りて。戸數ハ七千、人口ハ五萬、出船入船の數繁く。榮ふ船宿旅人宿。其れハ從ひ諸式の商賣。赤髯黒ン坊ナヤンく坊。マドロス士官ハ申すも更なり。支那への通商、上方への昇り客。近縣近郷より寄り集ひ。カテ、加へて。外國へ行く者ハ、日本の見納め。此地で遊び。洋行より歸る者ハ、日本の見初め。此地で遊ば。賑ふ揚屋西洋料理。ステ、ユナヤンく、スツナヤンく。坐わつて居て金を降らせる。魔曲の調べ。日毎に聞ふる軍艦の祝砲こそ高く譽を放つとや言はん。

叔東京よりの道程を申さば。海上里數七百五十里許。郵船で横濱を出帆して、神戸に着く。神戸から長州下の關。是れ迄が

江戸から長崎

丁度三晝夜。更ハ半晝夜休んで出帆すれば。玄海の灘を過ぎ。平戸の瀬戸を超へて。又半晝夜で港に入。即ち總計四晝夜半で、江戸から長崎掛けて高飛の出來るとい。世も滅相な開けたものよ。

港外諸島

灣の入口ハ島嶼多きが中。石炭本家の高島俊寛の古跡なる伊王島等と有名とす。いよく港に近きたる所ハ鼠島有り。高銚島有り。鼠島ハ神功皇后三韓征伐よりの歸途に立寄り給ひ。高銚ハ其昔キリシマン信徒を絶壁より逆落したる場所なりと言傳ふ。此處を過くれば。右の岸上ハ女神消毒所。避病院有り。左の岩間ハ金貸稱荷有り。金貸と聞いてハ名丈でも尊とやと。腹の中で二三度も唱名祈念を籠むる内ハ

瀛船宿

ハ船は早帆檣林立の邊に入込む可し。通船よ送られて、大波戸より陸よ上る。上る鼻の先き、石垣の上よ高く堂々たるが縣廳なり。縣廳の前の坂を上れば外浦町なり。差向き屈指の旅宿はと尋ねれば大よして聞ゆよきハ福島屋よ。萬歳町の上野屋今町の緑屋。縣廳の下手よ廻て江戸町よ丸屋あり。米金あり。鶴谷有り。何れも鹿略ハ致しませぬとの口上。宿屋よ着いて一休息の後。海岸でもブラ〜散歩すれば。最初よ目よ附くハ大波戸の鐵丸なり。鐵丸ハ岸近く安置せる周圍五尺八寸と云ふ大丸よして。即ち去る寛永十四年。天草島原の切支丹宗徒亂を起して。長崎よ襲來の風聞有るよ際し。警備の爲めよ鑄造したる石火矢の玉なり。

大波戸の鐵丸

出島

と聞ふ。橋一つ渡して有名の出島有り。出島ハ名の如く出島よして。維新の前。蘭人の居留を此一區よ限り置きしハ人の知る所。文明東漸の樞機ハ出島より發せり。杯。物識瀕の理窟ハ言ふ口持たねど。此處よ在る蘭國領事館よ就て。一話有り。抑此館ハ今と去る百年の昔。本國和蘭が時の猛雄奈破翁第一世よ攻め入られ。連戦連敗の末。城下の盟よ及び。其が爲めよ。世界の各處よ打建て置ける。四十餘の國旗ハ。無殘よも敵の手以て取除けられたる。其際よ。唯此一箇處。幸よ佛人の眼を免れ。安全よ國旗を懸へし居りたる。延喜宜しく。蘭人秘藏の公館よして。今よ移轉等の事なく。往時の其儘よ据置けり。此未永く同國人が愛國の儀表として存するなる可し。

和蘭領事館

新地

出島より大浦を過る間を新地と唱ふ新地ハ昔唐船の來る
よ當て場販即ち相對の貿易を防ぐが爲め奉行等の干涉
して其船載の貨物を悉皆納め置かしめたる貨庫の有りし
處よして今ハ其儘居留地となりて辯髮奴のはき溜メなり。
唐館の在りし處ハ新地の奥なる丘と丘との谷合なり昔ハ
館内と稱して一廓を成し出口々々門を設けて出入甚嚴
重なりしが今は支那寺が一つ二つ有る外は迹を遺さず名
も十善寺郷と改めたハ立派なれど實ハ貧乏もの博奕連の
住家よして大概毎日の様よ新聞よ出される厄介町唐ピ
黒縮緬の名産地なりト曰ふても扱ハ織物よ精出すことよ
なと早合點ハし給ふ可からずおか支那語よて唐ピと云

唐館の跡

唐ピ

ふ笛ハ元片田舎なる藪そだちのお竹どんを以てこしらへ
たる者よして此笛晝ハ竈の火を吹き味噌を摺る等よて下
女の能を爲す夜ハ支那人の手枕となり月琴よ合奏する時
ハ其音オカッチャン々々と鳴るよより極めて晝夜よ重寶
なるを以て狡猾なる支那人好んで之をおもちやとす云々
可愛樂誌氏の解釋なり又黒縮緬と云ふハ昔幕政瓦解の折
やむごとなき奥方令嬢世の變よ取つく島のなき餘り減ら
ぬ品の切賣を爲して生計を求め給ふ昔を忍びて多く黒
ちりめん羽織を着せしと云ふ事實が此語の起りよて今
ハ勿體なや古手の唐ちりめん一匹拾錢現金懸直無しの代
物まで矢張此名を冒し居るとなん

黒ちりめん

耶蘇教
學校

大浦居
留地

館内の右手の丘上は白塗西洋館の見ゆるハ鎮西學館なり。活水女學校ハ其裏手に在り。何れも宣教師の所有なり。此二校はスナール學校と鼎立して頗る盛大にして基蘇教の信不信論なく。英學志願生徒の近郷より來り學ぶ者多し。中にも女學校ハ地方は似氣なく隆昌にして學生は東京下り官員様の貴女達許りでなく。土着の女性も少からず。尤祈禱會は虚涙を翫ぼす杯も随分下手ならずと云ふ。此丘の後廻て又一つ谷を隔て。更は一丘の對する有り。丘上下り松と稱する所。天主會堂有り。尖塔天を衝て巍々たり。此谷間は海岸通りと并せて大浦と總稱すれど。奥の方は概して邦人の巢窟として洋人は海岸或は高見の場所を占め

十

税關

盛衰の
原由

居れり。海岸を過る。眞先は郵便電信局、三井物産會社支那日本貿易商會、三菱炭坑舍等有り。更に進んで洋店多きが中。雜貨商のホームリングを頭として洋酒店はパオル有り。藥店はフーパー有り、ライシングサンと云ふ。横文字新聞社あり。税關も其邊に在れど。割合はひまの様子。總べて此邊の形勢。神戸横濱に比すれば、非常な淋し氣を帶べるの事實を案する。此地從來の繁華は。鎖國時代は在て唯一の貿易場として、内外の客を誘ひ得たる果報と。五港の一なる名義の下。郵船や軍艦を招き得るの因縁と。因りて。細工さまたる特約的の現象として。多く貨物を捌く得意場を有し。廣く物産を持出す地方を和ゆる。因て致されたる自然的必至

十一

的の繁昌は非ざりしや知る可きなり。論より證據衰微し赴き勝なる現在の有様。此末世の變りて五港や三港杯云ふ特點を剝がれて後始めて口を開く共詮なけん。長崎市民たる者は今の内眼を覺まして九州特有の石炭よても利用して工業なりと起す工夫ころ肝要ならんか。

長崎の工業中最著大なるを飽浦製鐵場及ひ立神船渠と爲す。飽浦立神共は稻佐郷の續きよして製鐵所は七百人の職工を役し。船渠は關西第一の名有り。音は關西第一のみならず。横須賀ドックよも負けぬと最負する者さへある程なり。次に紡績所是も頗る盛大なり。外にガラス製造所及び麥粉製造所が各一個燐寸製造所が都合二個あれど何れも格

工業

勞力社會の食路

別のものよは非ず。近來外國への賣口宜しき樟腦は當地特産の一種よして現今數個の製造所有るを見れど元々是等は數百年掛て漸く繁茂し來れる樟を斬り即ち單よ先天の果報よ依頼して一時の奇利を僥倖すると云ふよ過ぎず。華族の世襲財産を遣ひ捨て榮耀を張ると同様餘りほめた話よは非ず。以上の製造所等の外は勞力社會は職業の路を與ふるハ石炭積上げ積入れの一事よして日毎夜毎出入する船舶のこと故其お蔭は中々小ならずと爲す。此地の下等社會の女子は各地に於けるが如く織物縫物等別段是れぞと曰ふ手工をば有せざれど其代りよ。右の石炭擔き等を仕事とすると見へたり。加之長崎港本來の面目として遊び

生計やすし

客と相手よ金を降らせると云ふ點は誠より大事因縁にして。女郎藝者は勿論。茶屋揚屋の奉口。唐ピラしやめん。黒ちりめん。何れ人のゾメキと笑ひと。アクビとて。飯を喰ふ種ハ餘る程なり。是等の故にや。此地ハ一般暮らし宜く。極貧の者迎ハ割る少なし。如何なる裏店の貧乏屋でも。行て見れば。小簞笥の一つ位ハ持ち居ると云ふ次第。誠は天道様日照りの善い場所と謂ふ可し。

去年の花見

想ひ廻せば。維新以前の長崎人民ハ。實は今人が其萬一をも推諒し得ざる程の好き果報を有したりし也。渠等ハ終歲拱手して坐せり。而して貿易壟斷なる一種の特福ハ。坐せる渠等の掌上に落ち去て。渠等をして天上界の安樂を獲せしめ

願つたり協ふたり

たり。渠等ハ始終安臥して眠れり。而して異人唐人なる一種の珍客ハ。牡丹餅を棚の上より轉ばし來て。開ける渠等の口中に充たしめたれハ。どうして喰はうか杯の考ハ。毛頭渠等の腦裡に浮ひ得る筈の無かりし也。其れどころか會所奉行所等の經費ハ。貿易監督より生ずる。巨大なる政府の所得を以て支辨したる故。渠等ハ生來租税と云ふ事を夢にも視ざりし也。否。政廳の費用を給して剩餘あれば。一切市民の頭數に割付けて。政府より惠與する。當時の常法なりければ。詰まり。渠等ハ逆まゝ遊山料を政府より徴收したりし也。福ハ福の神は肩を揉ませて。堯舜は腰さげらせぬ。長崎翁の生涯ハ。今日齷齪血眼で噪き廻る開化者流の聞けば。必ず眼を

まわす所なり。
 誠や家富んで兒驕るとかや。長崎長者のお坊様も。一端世の
 變動よ當惑せしが。是れハ一時極盛の運よ離れたと云ふ丈
 よて。乞食非人よなり下がると云ふハ非ず。王政よ成ても。
 外人交際上の智識ハ皆金と爲る。五港の一で諸の船舶が入
 込む。其船舶が皆金を捨てて行くと云ふ次第よて。生活の困
 難どころか。依然一個の樂隠居たると失ばかりし故。社會の
 組織こそ變更したれ。實際の狀態ハ尙舊の如く。今日も矢張
 通る世間よ鬼が無い。保合的の社會よして。町内和合市内共
 立。冠婚よも喪祭よも。近所で手傳ひ呉れる。病氣よも災難よ
 も。町内から助力して遣る事なれば。兒澤山の貧乏者も藪よ

甘
世

人物の
出
の
筈

捨る世話ハなく。取殘こされの老人も。首を縊る必用なし。畢
 竟。人間ハ樂みの擇り取よ生れて來た役目ぞと觀念するハ
 めでたしと謂ふ可し。尤も保合的社會の常として。激しき競
 争や。鋭き經畫が舊來の光景を破損すると容るさず。智慧も
 分別も。習慣の範圍外よ逸出すると禁ずれば。思ひ切た大事
 を企て。ツバ抜けた大功を目懸ける者の出様なきハ。不愛度
 と謂ふべし。例へば。諸式の商賣ハ。概ね組合あり。格法有り
 て。手も足も目も口も。其中よ縮められ。仲山も廣告をす。迎
 町内よ絶交され。引札の口上が勝手がまし。迎取引を謝せら
 る。杯。才智殺しの習風ハ。時節柄甚不似合なれど。情け有る
 世の清き景色。少々の夜露ハ。勘辨して。月の光を賞して。己ま

んか。

去れど世智辛き風潮ハ。長崎のみを安閑の地と遺す可しと
も覺へず。優勝劣敗の修羅街頭。早く首途の覺悟を爲し。例の
特點的の果報は油断せず。商業なり何なり。自力自發。純粹の
意味は於ける生産的の事業を勵まず。長崎士民の行末も案
じらるゝと謂ふ可し。商業の如き。當地ハ古き開港場でハあ
り。支那ハ近し。隨分其道ハ老練し。手も廣からんと思ひの
外。徴々振はずと曰ふ有様なるハ實ハ一驚したり。當地の
重なる商業ハ。對州五島邊より生ずる海産物。即ち鰯干鮑
の類や。肥前其他より出る製茶を支那人ハ賣渡す。正り。其
れハ支那へ直輸出してもせハ。又しもなれど。海一重打跨ぐ

商業振
はず

骨董が
名物

氣力あるハ非らず。坐わつて居て。居留の南京坊ハ賣渡して。
儲々の口錢を取ると過ぎず。其外輸入の唐物雜貨類を九州
各地へ。特産の煙草を上方へ卸賣する杯ハ。至極結構なれど。
是れ亦受働的の所作として。商業上。見上げたものと畏入る
程の事ハ無し。モ一一つ名物の骨董なり。是れハ本家の支那
ハ近き故か。此地古來の得意業として。今尙繁昌なり。骨董店
中。屈指の者ハ。麴屋町の池正。興善町の京井。豊後町の秋田屋
等として。一寸例を舉れくハ。ハンリー殿下來遊の際。着せる
當日。壹萬三千圓の買上も有りしと聞けバ。總べてわろく無
い商賣と見ゆ。因ふ云ふ。當地名産の煙草ハ。敢て善き原料の
有るハ。非ず。原料の上等ハ。概ね鹿兒島より輸入し來るハ

烟草の
調合

て。當市の長技ハ。只其調合を上手にして。都人の口は適はず
ると云ふ一點なりとす。

病院も
名物

話元へ返して。館内左手の丘上は。數棟の洋館を望む。真正面な
るハ。長崎病院にて。名醫あり。雇の洋人あり。法調ひ。扱ひ宜し。
亦名物の一なり。病院の裏は。第五高等中學校醫學部有り。又
其裏は。黴毒病院有り。ズーッと裏は。招魂社あり。是れハ。國家
の爲め。屍を原野に曝せる。愛す可き兵士の遺骨が。袖長連
の虐待に遇ひしを。忠烈の將軍等が。侃々として。正議抗論せ
る末。聖主の明德顯發して。終は。收骨招魂の御沙汰に及べり
其社地にして。爾來春秋の祭祀盛大なり。此事は。就てハ。忠義
の一念貫徹して。——豐碑屹立。聳雲漢。枯骨存亡不足歎。欲説

之れで
安心

丸山遊
廊

君恩慰魂魄。秋風動樹夕陰寒。——と詠するに至れる。谷干城
氏の名ハ。石碑と與ふ不朽なる可しと雖も。當初熱涙を以て
谷氏を動かしたる。當地有志者中。故澁谷五峯の如きハ。亦爲
めは記すべきの士と云ふべし。
病院から招魂社迄段々と高くなりて。此邊見晴し中々宜し。
此高臺の下の方。左の坂を下た邊が。有名の丸山遊廊なり。遊
廊ハ丸山寄合町の兩町より成立して。普通單に丸山を稱せ
り。有名の遊廊と云ふても。千住小塚原を山の手と並べたと
云ふ位の物なれど。少しハ此方が清潔ならん。娼妓も此方が
顔丈けてハ上等なり。凡べて長崎ハ妙な土地。娘子供を娼妓
よする杯ハ。左程恥と思はず。恥處か。藝者か。妾までも出た方

が幅が利くとの事。殊に他所の人と言へば、馬鹿に信仰して、徳川の落トシ胤と言ふても、公家の血縁と言ふても、啗語も、ペテンも、一切真に受けて大事がり。一年や二年、見繼いで遣る位ハ珍からず。旅の人で役人杯と來てハ、其れこそ大變。すぐと養子にほしがり、手かけにもなりたがる。尤男振はデミの濫いの茶人のイナセのと云ふても、通用せぬぞ。メッキでも流しても構はず。何でも思ひ切て、ニヤケル方が御意召すとの事。少し下等の連中に至てハ、丸山も三年やらぬバ、人前より出されぬと思ふ事。東京の醉狂連が、牢屋の様な貧乏小屋に居て、餓鬼に清元をうならせるが如しと云ふ始末。女郎も土地の者が競ふてなる。從て中々別品が出るると云

ふ次第。お負け廻はし無しの一夜妻。江戸でモテヌ敵を、長崎で討つ奴の多きも尤と聞く。

元來長崎ハ旅客遊び人を相手と立て居る土地なれば、人間ハ嘸や惡ズレの爲し居らんと思ひの外、實際を見れば、一般に佛さまで、氣が長くて、金杯ハほしく有りませんと云ふ様な顔付をして。善く日は、王者之民乎たる氣風を有するハ奇妙なりと謂ふ可し。蓋し唐船の南京大盡が千金一擲の豪舉を振ひし昔とハ事變れど、今猶金の取れ方が容易にして、暮しよ骨の折れぬ處より、自然氣も緩るく、人も温順なるものか。兎も角も、其悠々せる。氣早の江戸ツ子も、齒痒ゆくて堪まらぬぞ。病人の相手杯も、極上なり。たとへば買物

よ行ても入らしやい共言はず。料理屋よ入てもお上がんな
さい共言はず。此方の品が氣よ合はぬと曰ふても。彼方の品
を出すてハ無し。向ふよ在るのハ何かと問ふても。ヘヒエ
と答へた切り。二三度催促せぬ内ハ出してハ見せず。店よ立
ても出てハ來ず。冷かしなら。代物よ障はるなと云ふ權幕。迂ッ
カリ直切り過ごせば。直ぐと御不興出した物もサツくと
仕舞ひ込み。お跡から届けましようの口上ハ。通帳で取ても
望み難く。客を引込む掛言葉ハ。公園のお寄りマツセ位が頂
上なり。茶屋よ腰掛けても。暑いの寒いの世辭を並べハせ
ず。お茶を出してツーンと濟まして居るばかり。歸る時よ成
て。始めて氣の附いたらしく。|| マア善じや御坐んせんか、

アంత其様急がらんちや、どう御坐んすか || と引留める
丈が飛切の愛想なり。是れも畢竟市中總體よ齷齪せずと。飯
の喰ひ得る故とハ云へ。愛嬌商賣の藝者女郎が。金佛然と坐
わり切杯は。餘り感心の出來ぬ話なり。

感心は出來ても出來なくとも。|| 長崎ノ一丸山藝者ハナ
ゼ遅イ。來ールト其儘お雛様一(ホーカイ)。其癖無闇よ轉
ビーマス。々々々々。三絃枕 || と云ふ謠は。殆んど實地の丸
寫しよて。藝者は坐敷よ出ても。御坐附も直よは中々挽出さ
ず。別よ注文が無けれハ取持もせず。下手よマゴ附くと。客の
方で機嫌を取て。坐敷のシメリを乾さねばならぬ様な事よ
もなす位。ソコデ女郎は猶更の事。丸で箱入の御嬢さまと庚

通人泣
かせ

申塚よ坐わらせたるが如く。氣のきいた洒落や粹な謎ハ。言
ふても通せず。何でもかでも感服謹聽すること故。いたづら
も餘りの出來ず。ナモンペリ。澁い味の有る。此邊を見て。貰ひ度
と。内々心よ待受ても。其手ハ桑名の。焼いた振などの愛嬌ハ。
夢よもふり時かれる氣遣なし。東下りの粹士は時折不平を
まぼせど。其所が却て此地の直打よて。内氣で親切で。當らず
障らず。空追従もなければ。ふるのいぶすのと云ふ天氣も無
し。傾城よ誠なしといま。丸い玉子の様な坊ッチャマも。四
角な肩の鬘さんよ。一視同仁の惠を授け給ふが故よ。猛き
軍艦の大丈夫も。此地よ限て。酒樓で亂暴を働いた例の無い
程よ御意に適ふとなん。

女郎に
たりふ
りなし

妓樓の
親玉

閑話休題。丸山の妓樓中。最高名なるを花月樓とす。次は角の
油屋よ。大壽樓。此三軒を最上として。玉屋松月大藤の諸樓が
中店株とす。酒は飲み次第。御馳走は喰ひ次第で。上店一夜二
枚が定まり。歸り掛けよ朝飯さへ出させて平氣なりとは。テ
モ安直なる哉。丸山よ三個の名物有り。一は花月樓の鶴枕。是
れは唐の君と朱唇で融かした。楊貴妃姉御の用ゐ給ひし物
也。何時の頃よか此地よ渡りけん。今尙同樓よ現存して。何所
よ觸わつても。キュー〜鶴の音を出すと云ふ趣向の奇物。
少しく長崎の事よ通する人は。態々同樓よ立寄て。見物する
を常とす。加之同樓は頼山陽が妓夫と爲りて。浮世を忍びし
所なりと云ひ。維新前後よは無頼の書生。今は高位高官よ上

丸山の
三名物

山陽も
一度の
妓夫

り居る人々の曾て此樓に遊びし事有りと言ひ。且つは古來名人の書畫を夥しく藏する杯。かたゞ好奇の者を惹くことなり。次の油屋及大壽樓の門。是れハ若いものゝ耳は合はぬけれど。來歴を聞けば。如何なるふかと曰ふて。老人杯の感心する話柄なり。其ハ餘の義も非ず。在昔幕政の頃ハ遊女屋風情の門を立る事ハ一般禁制なりしを。寛永の頃ハや。駿河大納言の子息長七郎と云ふ人。四方周遊の序。長崎より來り偶登樓して門無きを訝かり。主人を命して新之を建てしむ。主人一旦ハ驚怖の思有るも。當時將軍家の叔父なる長七郎の命なると以て。こはぐ門を立てたりし。別は咎めも無く。其儘天下御免となりたりとぞ。時代の久しき。其折

遊樂殿
御

青餅の
因縁

の門ハ無論存在せねど。大壽樓ハ本門。油屋ハ裏門の形丈を取て。今が世迄。封建時代の名残を留めぬ。長七郎の墓ハ田上ヨ在り。幕政の間ハ頗る鄭重の取扱て。奉行の交代毎々。着早々必ず之を詣てしと云ふ。三つの内。今一つハ。青餅亭の青餅あり。昔密通者他方より來りて。丸山よて青色の餅を造りて。賣出せし。圖らず繁昌して。富榮の身となれるが。其れより土俗密通者を稱して青餅と曰ひ。轉して。今よ至て。間夫情人を廣く青餅を以て呼ぶよ至れり。數度の火事よ焼け失せたれど。今よ青餅亭とて其跡を留めり。

丸山よハ。妓樓の外よ十數戸の藝者家有り。當世流才子の雛方と聞へし。某居士の里なる。福地屋の桃太郎を始めとして。

三十
小桃愛じ金太郎が當時の流行ッ兒。其れも次くハ桃葉桃兒
愛兒愛吉やつと等の舞子よして。踊の尤妙なるハ桃吉。一等
の豪傑はツイ〜猫の豊治なり。此ほか久米先生の好きそ
ふな。生白い。ポツナヤリ顔も少からぬ。兎角安賣が得意よ
て。藝筋と品格を研かねバ。大方名を出す程の人物も非ず。先
つ顔立の可なりな鈴吉菊松。此頃出た桃香も愛香龜八等が
庸中之姣々なり。寄合町も廻てハ。人好きのすもみね鶴腕の
利く鶴次も千代香。これ等が一寸爪の長い古猫(イヤサ)手足
の能く動くお雛さほの由。其お雛を並べる場所ハ。寶亭かし
ま屋春若屋等。ズット粹なお茶屋。其れも西洋料理屋もは福
屋。これハ玉も瑕位の有る共。割烹の一點でハ。東京の精養軒

よも負けぬとほめる人有るハ。うそか誠か。兎も角長崎料理
屋の立物よして。瓊浦倶楽部を食客ウケモノも置く程の豪勢なり。
豪勢ハ藝妓迪其通り。指折りの連中なら。藝でも装束でも。東
京よも負けやし。マッシエンと。りきむ老妓オウキも無きよあらぬ
ど。粹黨の局外よ立て。輿論を採酌する病仙ヤクセンもハ。此儀判決な
り難し。只遊び場所よ行て。一寸氣の附くハ。獻立ケンタツの永ふして
人を倦殺ウツシさる事。勘定のお定り通りよして。一遍殺しの目よ
遇ふ心配のなき事。祝儀の必要無ふして。度胸を見せる魂膽
のいらぬ事。手管の短くして身よからまらず。無心の細くし
て。手こたへの無き事等よして。他所と違ふて面白く覺ふる
丈ハ實際と斷言仕らん(シテ)〜。贅ケツのほつれ御好み料ハ如

何より、ツイ髮結を聞くのを忘れた。

縣廳の下から丸山へ來る邊が、下町築町濱の町石灰町等とす。此邊ハ長崎最要の市街として、丁度お江戸の日本橋近傍と云ふ場所なり。金物船具屋ハ、柳屋唐物屋ハ、共立社福内屋みね屋、呉服屋ハ、島瀬、藤瀬、博多織屋が一軒、縞柄御望み次第、警察署が一軒、曾て壯士の退治政黨の解熱、骨折る必用、遇はず。下町の高野ハ、日本カラスミの本家、築町のりり屋ハ、材木町の蒲池と共に、此地藥店の隨一。長久橋の十八銀行ハ、長崎紳士の間屋丈ありて、建築堂々、此近邊での、否、長崎中での親玉、濱の町なるくるかね橋ハ、日本鐵橋の元祖として、明治二年、本木昌造の架する處なり。因よ云ふ、本木昌

指折りの商店

文明的
人傑

造ハ實よ長崎開市以來第一の人傑として、始めて活版業を新町よ開き、兼ねて塾舎を設けて、文明流の教育を生徒よ加ふる等、天下よ卒先して新事業を創め、文明の進歩よ裨益する處、尠小ならざるハ、天下の知る所なり。

思案橋

濱の町通りを丸山の方よ來れば、突當りの傍よ、思案橋と云ふ橋有り。是れハ直く傍の思切橋と并せて、南廓通ひの情を、橋の名よ歌はせたる迄ならんと。一寸思はるれど、其れよりハ一層深き謂はれ有り。抑是れハ昔シヤムロの船の破ッレを以て創設せし故、シヤム橋と唱ひしを、後世シヤムシヤムと轉訛せし也。物識の古老ハ語れり、思切橋からすぐ丸山よ登る。登る口よ、福砂屋と云ふ長崎一の菓子屋有り。之れハ

菓子屋

當地名物のカスターラ橙漬は勿論西洋菓子一切の製造も巧み也。但しビスケットは近所の清洋亭も花を持たせてよし。思案橋の架せる川も沿ふて山の手へ進んで行當た所を高野平と云ふ。高野平は祇園神社あり。風光頗る佳なり。神社の下は温泉茶屋あり。市中は珍しき丈も體裁の感心出來ぬ割は、中々の賑はいなり。神社の傍は崇福寺と稱する唐寺あり。宏壯雄偉、殆んど伽藍中の魁たり。此寺内は、一の太釜を安置せり。銘は聖壽山崇福寺施粥巨鍋天和二年次壬戌仲春と有り。即ち饑饉の際し。施粥を炊くも用ゐしものなり。崇福寺より山の根も添ふて。北の方へ廻れば。何れも佛閣寺院の續きよて。峻はしき石段秀てる塔堂。見事も揃ひり。其最

支那寺

屈指の大寺

なる者。淨土宗の親寺も大音寺有り。曹洞宗も皓臺寺有り。何れも境内の廣く、大樹の繁れる工合。石垣の高く、古びて苔附ける工合。中々も奥床し。大音寺の境内も、開山祖師を祭る徠の碑文有り。見事なり。皓臺寺のすじ向も、一力と云ふ料理屋あり。株古らし。猶ほも進めば禪林寺有り。此寺は石田三成の創立よして。三成の浮世を忍びし當時の遺跡種々今日も存せり。彼奴中々の曲者。關が原で大勢人をば死なせて。自分丈ハコッソリ藻抜けの壳をキメ込まぬ共謂ひ難し。卑怯な男も己れ先づ死せずして人を死なしめんと欲す。宜なり。其天下を得ざるや……と慷慨する共。相手の無い喧嘩。つまらぬ。禪林寺を過れば。伊良林神社。俗も若宮稻荷と云ふも

三成の横着

正成の
信神

至る。此稻荷ハ中々商賣上手よて得意甚多し。且つ餘程物好
きよて社前ヨゴタノ並べさせた赤木の鳥居ハ勘定して
見れば丁度三百本有り。此稻荷元來楠正成の尊崇せし神體
よして其れが爲め慶應の末明治の始め頃ハ勤王稻荷迪一
方ならず參詣ありしと云ふ。若宮の下ハ藤屋有り。是れハ迎
陽亭と並びて長崎料理屋の兩關株なり。
其れより尙北の方へ廻ればトント市街の外れ島原諫早よ
りの本道のハイリ鼻と云ふ處ヨ立場兼料理屋の螢茶屋あ
り。是れハ閑靜なり。小河が軒を繞る。其昔有名の文人が茲ヨ
遊んだと云ふ來歴も有り。旁一寸小意氣な場所なり。茶屋の
前ハ一の瀬橋有り。一瀬ハ此邊の總名よして。往古ハ此邊迄

螢茶屋

彦山及
山娥媚

海と爲り居りて唐船の泊せし因みを以て此稱有り。今尙橋
下の大石ヨ潮汐の痕を認め可し。螢茶屋の上の山。一ハ彦山
よして。一ハ娥媚山なり。娥媚山ハ俗ヨ飯盛山と唱ふ。昔支那
人來り見て以て娥媚ヨ似たりと爲し。即ち之ヨ名付けし由。
山頂一瞰。西海萬里の雲煙を咫尺ヨ唾す可し。登臨の快名狀
す可からず。一瀬ヨ無縁塔あり。往時痘瘡の流行ヨ斃れし者
を供養せる也。

東海氏
の墓

螢茶屋より町の方へ向き返へつて。本道を西南の方へ來れ
ば。遠く法華堂の有る七面山を望み。近く東海氏の墳墓を見
て。師範學校の前ヨ至る。東海氏の墓ハ春徳寺後山の半腹ヨ
在り。石の門。石の欄杆を設け。塙壁を圍よし。花卉の彫飾あり。

或ハ文字を刻す。尤其巧を盡せり。是れ亦一種の名所なり。何故ハ斯く普通外れの壯麗を致せしものかと尋ぬる。東海氏とハ長崎の譯司よして。非常の素封家なりしと。放蕩の子息出でて。殆んと家財を傾けんとせしが。父死して後。彼の子息自己の養子なりし事を始めて悟り。痛く不孝の罪を悔ゆるも。臍を噛んで詮無ければ。セメテもの罪滅しよと。墳墓よ美を盡して。亡父よ謝せし次第なりと。里俗ハ傳へり。是ハ附會の説として見るも。亦以て當時譯司等が格外の奇利と博せし状を察するよ足らんか。

織部亮の墓

春徳寺の下。夫婦川郷よ長崎織部亮の祠宇有り。織部亮ハ長崎甚左衛門の弟なり。兄を助けて深堀勢を拒ぎ。此所よ戦死

師範学校の價値

せしと云ふ。土民此兄弟を混同し。織部亮の祠宇を目して。甚左衛門の墓と稱す。開市の先祖なる上。靈驗著し。迪祈願を籠むる者多し。春徳寺の後山老松五六株。天よ参する處。甚左衛門の城趾有り。今ハ八十八箇所の石像安置を爲し。弘法大師の祭日よハ。非常の賑はいなり。東海氏の墓見物かたぐ。雅人ハ宜しく。杖を曳く可し。

師範學校ハ男女兩部。一構への内よ在り。新築の西洋造りよて。構へ廣く。立派なり。此ところ。一寸天眼通を放つよ。生徒ハ男女とも温順よして。且つ勉強なり。殊よ女生徒の方ハ。都會よ在る立派な學校のお殿婆連よりハ。寧ろ取る可き點多けれど。一步の加減で。柔弱無氣力。男ハ人形。女ハお雛よ變ずる

傾有り。土地柄猶さら奮發して貫ひ度ものなり。
 次は管理の行届いて、評判善き監獄を過ぎて、諏訪神社の前
 へ至る。諏訪の社ハ長崎鎮守の大社にして、諏訪森崎住吉の
 三體を合祀す。由緒正しく、神事の大業なる事。近縣は比無し。
 境内一万坪餘。一寸見上げた所でも、鳥居の宏壯なる、石段の
 廣大なる、實は堂々たるものなり。社頭は旨まい牡丹餅を賣
 る爲め、殊更参詣人の多しと見へたり。社の右手を西山と
 稱し。左方を公園と爲す。西山ハ土地閑雅にして、松の森神社
 有り。天満宮を祭る。宮の前は富貴樓有り。體裁眺望俱は宜し。
 株ハ藤屋迎陽亭より一步を譲れど、今町の富士亭と相並んで。
 實際ハ前二者と首ツ引なり。富貴樓の下は花園と稱する料

諏訪の
餅

松の森

公園の
風情

理屋あり。手前は瓊林館有り。是れハ席廣ふして集會は適せ
 り。公園ハ元某と云ふ寺地なりしを、切開いて公園と爲せし
 よて、細道をたどり、くして登り行く。上は六角堂有り。下は
 ハ吹上げの池有り。老松怪樟の鬱蒼たる者。幾百株の數を知
 らず。氣清く望佳なり。社前の藤棚、池邊の元日櫻、一株も景
 ハ籠もれり。四時の眺め永く盡きず。掛け茶屋兼小料理屋が
 一二三都合四軒有り。お手軽さまい善けれども、櫻泉亭や曙
 々、調べ合はする野暮蛇皮線、圍いの鹿の鳴音を潰す殺風景
 異人唐人打雑で、絶へず入込む吞江や鎮洋館の軒の下。港
 の風情ハ此よて知らる。

公園の下り際、交親館、即ち縣會議事堂あり。其下は知事官

宅及び中學校有り。此を過ぎて西の方へ廻れば、商業學校及獸醫學校の相并ぶ有り。猶山の根より従ふて、海岸指して進めば、右より立派な支那寺を見る。其先きより法華宗の親寺、本蓮寺有り。本蓮寺の傍より西坂有り。西坂は島原一揆の兇徒三千三百人の首級を埋めし場所也。今より首塚を遺こせり。坂の前を過れば、海岸より出づ。海岸より砲臺有り。其を護る兵士の分屯營有り。又其近所より監獄の出店、官有の米廩等あれど、珍しき物としては更になし。オット仕舞ふた。迎陽亭は此邊と聞いたが、何處で有たか。イヤ、支那寺の直ぐ前か。驚いたナア、是れで長崎一か。見外したも尤だ。丸で中橋のくじら汁を見た様だぞ。ナニ、中へ見掛けよよらないと。ドレ一休しようかと、立

西坂の
首塚家造り
の一斑師三絃
の師匠

寄りて見れば、此家のお神さん、土地よしては愛嬌者なり。あとで聞けば、流石は踊りの師匠でもする位だからと申す。何の踊かと尋ねれば、諏訪の祭禮より町々から出す踊り子。此はお神さんと、紙屋町のおいよ銀屋町のおことの三人で、稽古を受持つと云ふ次第。序より三絃の師匠を申さば、本下町のおしほ大井手町のおたつ婆が、一等で御座るとの返答。ナール程、如何にもソーカーかと。感服も何もせぬと。話の藥きを旨まぐするが、作者の上手と思ひ賜へ。

此れで長崎もザット一廻りして、一息ついたれば、是れより元へ返りて、縣廳の邊を案する。縣廳の在る處は、西奉行所の跡より、古來森崎と稱す。元龜天正の際まで、此所より一の

森崎の松

瀬迄、丘陵一帯堤の形を成し、樹木森立海中より突出して、扱ま
 そ森崎の名有りしとぞ。今も縣廳の構内より残れる一株の松
 ハ。長崎開闢以來の附き物として、深堀福田邊の漁民ハ。長崎
 と言へば即ち森崎を指して舟を着ける程の、目印の松なり。
 松ハ千年経れば、枝條地より垂ると聞きしが、此松如何にも其
 趣あり。葛籬より封せられ、孤立して昔を忍ぶハ、別けて床かし、
 扱又此港より鶴の港なる別號あるハ、此森崎を股として、海水
 深く左右より入て、兩脛を成し、港内ハ其翼を張るが如く、山上
 より之を望めば、恰も鶴の天より翔る勢あると因ると云ふ。
 縣廳の前より警察本部あり、商人集會所あり、大神宮の出張所
 あり。本部の隣より西洋料理屋の外國亭あり。是れハ濱の町の

二新聞
二團體

清洋亭と併せて上等株なり。輕罪裁判所控訴院、其次よりハ郵
 便支局三井銀行支店及び文明東漸の途上、先登第一の名高
 き新街活版所を裏手に遺こし、縣廳の前の通りを、眞直より公
 園の方へ向ひ行けば、本博多町より以文會社有り。鎮西日報を
 發兌するは此社なり。之より反對して近頃一旗揚げたるは、濱
 の町長崎新報にて、資けず劣らず勉強なり。蓋し縣下より二個
 の政事團體あり。一を鶴鳴會と稱し、一を同好會と曰ふ。前者
 は國民主義を抱持して、着實の人物多く、後者は改進黨を
 主張して、敏捷の才子より富む。前者は勢力を近郷より有し、後
 者は根據を市町より据ゆ。前者は老成人豪農等を主とし、後者は
 若紳士代言人等を重しとせり。而して鎮西日報は前者を代

町の正味の跡海

表し。長崎新報は後者の機關たるを以て。主義の異なる利害の同しからざる。終始睨み合ひよて。相譲らざるも理りならぬ。會社を過れば。右は書記官邸有り。左は鐘撞堂有り。又其先きは市役所有り。勝山小學校有り。勝山小學は女子部をも併せ有して。生徒數多く。教授評判宜し。先づ目よ附くは。此位のものなるが。又手此縣廳より公園迄の通りと。向ふの寺の有る山の根の通りとは。相對して同様の高さよ在り。此二つの通より他の街衢よ出づよは。是非坂を下らぬ。ばならぬ様よなり居りて。詰まり長崎市街の正味ハ低き窪地よ在る事なり。即ち往古海水の差引し居れる跡に存するものとす。碧海蒼田世は變るもの哉。

眼鏡橋

所謂窪地の市街は。之を貫くに一二條の川を以てす。川に架するの橋。特に注目すべきは。濱の町鐵橋の外。酒屋町より西古川町に跨る眼鏡橋あり。是れは寛永十一年。明僧興福寺住職如定の架する所にして。慶安元年に一度修繕を加へしより。今に及んで二百年。數度の洪水に遇ふも。曾て破損有る無し。蓋し長崎は勿論。日本に初めて架せる眼鏡橋は此橋なるべし。眼鏡橋の近所は共樂亭有り。可なりの割烹店なり。一層川上は玉川あり。是れハ軍艦等よ能く聞こは居る料理屋なり。又其先は寫真師上野彦馬あり。日本の魁と稱する丈。手際ハ東京の鈴木や小川と肩並べ可し。長崎よ過きたる物が七ツ有る。寫真は洋食。鼈甲細工。町家の石垣。女の駒下駄。諏

長崎の七自慢

長崎の
三不足

訪の公園九日の踊。其外針と線香と彫刻。手際なれども目よ
立たぬ。無くつて困るものが三ッ有る。漬物屋と合乗車路ば
たの大便所。話ハ細かい。

町の
化けお

玉川の在る紙屋町界内ハ町藝者の巢窟なり。町猫の大將ハ
おつきおとみおたけおぬひ杯云ふ年増。中猫ハ突飛連のお
雪おつぬおよぬ。小猫ハ花の小三おていおひさ。小小猫ハ雷
の八百吉おむらなりと風聞で承る。全體町藝者とハ。丸山の
猫と對して。山と町とを分ちたるまで。山ハ色で持つ。町ハ藝
で持つ。山ハ抱へ子多く。町ハ地前多し。山ハ改進的なり。今様
の東京風。町ハ保守的なり。昔風の土地氣質。一ハ立廻り軽捷
よして。取なし上手なれど。往々お殿婆の嫌も有り。一ハ所帯

黒人の
眼の玉

染みて。遠慮勝なれど。餘情亦其裏よなきよ非ず。互よ一長一
短ハ。手よ持つ。褻の取り様で。上がり過ぎてハ。陽氣よ浮き立
ち。下がり過ぎてハ。陰氣よ沈む。違ふ氣風ハ。猿と羊。羊ハ紙幣
よ縁あれど。さるハ。狭斜の忌ミ言葉。奇麗よ直ほして。梅と柳
か。牡丹よ藤か。藤屋よ落合ふ年賀の會。二ッ并んだ大廣間。貴
姐老姐と譲り合ふ席の上下ハ。互ヒ先。白と黒との違并ハ。無
けれど。權式態度。何處となく。一目二目。手の後くれ。考へ込ん
で下よ居る丈が。町の手飼ハ。山育ちよ及ばぬ。是れも猫の本
性。動物學の原理。如何よも斯く有るべきか。トハ言へ。是れハ
土地丈での比較論。東男の肥けた眼よハ。何れも矢張りお雛
さほやら起上小法師。五十歩百歩と見るなるべし。お雛の衣

里猫山
は猫に及
はず

裳ハ立派なるべき筈。其れも昔ハ京女も吉原の張を持たせ。
 長崎の衣裳を着せて、大坂の揚屋で遊ぶと。天下三がの津も
 混せて歌はれた程の當地。一般の風俗今尙華奢と稱すべき
 なるも、藝者の風體が割合も立派も見へぬハ何故ぞ。土地の
 人ハ態ザと地味も拵ふるからだと辨護すれど。濫い方で賣
 らうなら。粹で奥ゆかしい處が有てほしい。服かみ裳りも好た向かも立
 振ま舞まい。よろづ其れも相應せぬハ、感服ハ出來申さず。忘わかし地
 體が町でも山でも。三絃を手頃の筈も、疊みこんで。管屋無し
 ぶ。ヒョイヒョイ、脊負ふて出て御座ると云ふ代物なれば。先づ
 口ハ之れでお仕舞。

一本參

安猫本
性違は
す

劇場

紙屋町の裏の八幡町に、劇場一座有り。是れが長崎唯一の遊
 藝場にして、芝居の外には寄席も無ければ、見世物も無し。時
 々大坂下りの新内語りや、上海戻りの手品師杯が來れば。一
 切此劇場で興行する事なり。此外ほか人出ひだりの有る所は、大波止に
 丸山下の兩勸工場。公園や丸山の冷かし。夏向は港外鼠島邊
 へ海水浴に出掛くる等が、遊山の種なり。鼠島には海水浴場
 の設立あり。日本人はゴタゴタだんべい(大傳馬船の俗稱)杯
 に積み込まれて、多く此處に遊べり。流石は西洋人は師匠丈
 に老も少も女も男も、一家揃ふて持切りの一船に打乗り。泳
 いて遊んで、喰ふて飲んで、歸る者。幾十組と云ふ程なるは豪
 勢なる事なり。

海水浴

氣候

抑も當地氣候はおしなべて温暖にて、極寒にては華氏の寒
 暖計四十二三度を下らず。波み置きの水は氷る事さへ稀な
 り。空氣の清潔なる事、塵埃の起たぬ事、春秋の天氣の好き事
 等は、日本國中にも例少き處にして、大寒の明ヶより、梅雨の
 入頃迄の空工合、其麗かき、其長閑き、筆にも口にも及ひ難く、
 且つは暖地のお蔭として、菓實の生熟は年中絶ゆる期なく、橙
 柚蜜柑ザボンの類、庭中に繁茂し、松茸は春秋兩度發生する
 杯、結構にも又愛度事ながら、其代り夏の暑さハ又格別甚し
 く、土用後は毎日九十二三度以上に昇り、街道に矢鱈に并べ
 た敷石は燒けて、焰はなを出し、一陣の風さへ吹かず、ギリ／＼蒸
 し附けて堪ふ可からず、以て長崎の最大缺點とも稱す可し。

最大缺點

夕暮

長崎の夕暮ぎ世人の能く知る如く、夕方は大概風なく、波
 静かなれば、山陽も此地に遊びし時は、始終穀堂梅泉等の文
 人と扁舟に棹して、天然の風景を愛せしと聞きしが、風流も
 善けれど、爲めに暑いのには閉口なり、風が無ければ納涼に
 出てもつまらずと云ふて、内に居てハ猶あつし、仕方なくて
 海水浴にても奮發する、海水浴も、縣廳の小蒸氣に乗て出掛
 る、髻連でも有らば、悪ろくないが、通船でソロ／＼行た分
 には、時間が掛て往生なり、之れもドット志ないと云ふて、極暑
 の凌ぎ方、池外には無し、先づ一里半ばかり隔りたる茂木よ
 車を飛ばすか、又ハ浦上の沸カシ温泉へなりと、出遊ぶとす
 るも、轉ばし客のドンチャンも夏蠅ければ、此度ハ島原温泉

浦上

嶽へても昇るが最後の策なり。

茂木ハ高野平の先なる海濱の小村なり。潮見崎の観音として、有名の観音あり。松栢樓と云ふ料理店もあり。月よも宜しく、海水浴よも宜しく。鮮魚が自在なる故、保養よ出掛ける人少からず。茂木の近傍よ既岩いそか有り。行徑頗る峻はしけれど、景色の妙ハ長崎一足の勞れを償ふよ足る可し。浦上温泉と唱ふるハ、酒田屋古田吉平の所持よして、同人ハ兼ねて事業心深く、千辛萬苦を経て、鑛泉を發見し、浴室を造營し、今ハ旅宿と割烹店とを兼ねて、遊客を待せり。少々不便なれど、田舎景色の中よ立派な構へ。猫よひかれて、道尾参りを爲す人多きも尤なり。且つ屋後よ立てる一丘ハ登て見れば、眺望絶佳、雅客

の遠足よハ適當の場所なり。

道の尾温泉よ行く途上、浦上宿よ大神宮有り。神功皇后の古迹なり。又其先よ十字架の立てる一丘を望む。之れハ基督教徒が聖山と唱ふる小山よして、山の形、地の勢、耶穌の磔刑よ遇ひたるセント、ヒル(聖山)の意と甚た相似たり。此名を蒙れり。同宗徒よ取てハ、珍重の場所よて、洋人の來崎する者、とざく之を訪ふを常とせり。蓋しキリシタン宗徒二十四人よはりつけよ掛けし場所ハ、此十字架の後、口手なる溪間よして、正よ下がり松天主堂よ存する磔刑の油畫と照應せり。油畫ハ數十年前佛蘭西本國より送る所よて、頗る綿密確實の圖なりと云ふ。

温泉嶽

温泉嶽ハ有名の高山にして。嶽上小地獄と稱する處、下田と云ふホテルさへありて。暑中の上海香港より態々來り遊ぶ洋人も少からず。空氣ハ清潔氣候ハ爽快にして。眞夏知らずの場所なり。嶽の下海の岸に小濱有り。此處の温泉ハ諸病に効驗ある趣にて。春向杯の浴客ハ非常ニ夥し。宿屋ハ三十戸もあれど。皆木賃の趣向にて。慣れぬ者ハ甚うるさし。且つ食料其他萬事不自由ハあれど。人情の樸茂ニ接し。面白き言葉を聞いた上、一日半助足らずで。最上の紳士風を吹かせ得る邊が。花なりとぞ。小濱ハ陸路十五里もあれど。二里先の網場と云ふ漁村より舟を僱へば。五六時間で着し得べし。便利デハある。氣樂な土地柄デハある。夏も冬も押

小濱温泉

冷かしの場所

出す人の少からぬ。夏の夕納涼と云へば。先づ大方ハ南廓や浪の平。大徳寺のやき餅屋。公園茶屋の冷かしゾメキ。冷かした積りで。實際ハ兩の腋した。汗ビッシヨリニ成て。噪き廻る御苦勞連を多しとす。

缺點

更ニ一二の缺點を舉れば。路幅の狭く。車代の高き事。商賣ハ懸直の甚しく。愛想のなき事。是等は先づ勘辨の出來るとして。又一番の不都合ハ飲水の不良なり。市中一般。大概ハ生ぬるき灰色の水を呑んで平氣なり。新來の身ハ頗る氣味よからず感せらる。ならひ性を成して。臭を知らずとハ云へ。場所柄も似合はず。水道敷設ハ苦情を言ふハ甚た不服なり。其れも住民ハ難澁者が多くて。水道費用が出されぬと云ふ

飲水の不良

ならば格別ながら。左になくて。日本も珍しき樂土。諏訪の祭も。年々拾萬圓もたゞき込む。勢の有る哥々達かたがたのくせも只管快を一時のゞ、貪り。水道惚れのした知事殿を泣かせる杯ハ、サラ／＼氣の知れぬ了簡なり。尤之れが政治思想の十分發達し居るが爲め、干涉政略を排斥すると云ふ次第なきば結構なきと。根が勝手撰出の市廳役目も。他方人よ占めらる。今年始めて縣會も二十人程の傍聽人が見へし。迪鎮西日報もほめらるる位の度合よて。改進的の事業政治上の問題ハ。飛入りの他方人よ委して顧みず。自家ハ偏よ舊態よとがみ附くを役目とする其有様。萬端受働的よして。役人信仰か。先達崇拜。彼も出てききば此よ歸す。卑屈と云ふ點よ至

時節おくれ

ては一なり。到底自治獨立の氣象よ富めりと認め難きハ、心外よこと。

水道の噪も追々一陽來復。融けて流れて睦み合ふ。日出度春よ向ひたきと。此ハ時候柄と云ふもの。敢て人民の智識が一時よ上進した故の結果と證し難けきば。苟も此地の憂に先て憂ふるの志士は。此際姑息よ流さず。一時を彌縫せず。能く根元の弊風を究めて。本來の面目を改良する工夫こそ然るべし。長崎人民本來の面目。一言以て之を蔽ふ。曰く。祖郷の愛慕よ熱中し。習慣の範圍よ満足する。蝸牛的安心立命之きなり。渠等ハ先祖傳來の長崎を以て。最上無上の好土と信仰するが故よ。眼のつけ所は。始終すり鉢の底よ均しき。市街の界

内を出てず。渠等ハ只管古昔の隆盛を追慕するが故ニ善か
 きあしかき舊禮舊慣を破却するハ此結構なる土地を傳へ
 吳きたる先祖ニ對して恐あり細くも狭くも昔風を立て通
 すこそお諏訪の鈴を振た男子の意氣地なりと心得居まり
 渠等ハ眼前日新の事物を見て局面一變せると知らぬよあ
 らねど絶て商賣向ニ新案を出し社會上ニ改良を加へて立
 身經營を未來ニ期するの覺悟ハなく徒ニ過去を望んで世
 が末よなきりと觀念せり畢竟するよ其性情ハ受働的なり
 其好尚は崇古的なり其氣風は處女的なり其社會は封建社
 會其儘なりと謂ふべし尤維新以來廿三年の今日有形事物
 の變化昔ニ比して天地觀を異よせるは申す迄もなき事な

がら人若し能く無形的精神の奥ニ立入て觀察を遂げなば
 此言の中らずと雖とも遠からざるを徵せん例へば正月の
 祝の如き新曆ニハオランダの正月迪纒ひなまつりハ人前丈ひとまへを濟せ
 ど舊曆ニハ日本の正月として十分盛式を行ふことなり盆祭
 も亦其通り佛様ハ昔の曆で死んだもの故矢張り舊曆でな
 けきば御承知がない筈との理屈で屹度仕直ほしを爲すと
 云ふ次第よて其邊の口實を味ひなば隨分妙を覺ふ可し
 否々是等ハ老耄連の状態のみ少壯の子弟は皆學問もあり
 教育もあり當世風なり開化風なり長崎迪古物の博覽會で
 は御座らぬと青筋張ての辨駁は如何よも最前より心得て
 候去り乍ら長崎の天下は少壯者の天下ニ非ずして年寄老

分の天下なるを如何せん舊弊者流最多數を占め實際斯る事態を現すと如何せん。抑かゝる保守的の社會に在ては習慣が第一の勢力たるは必然の事情にして。一は舊禮、二は舊格と萬杓子定規を守て動かす。其まが加ふじて古顔崇拜の惡弊を生し。智慧の嵩より年の功で幅を利かせ。憲法發布をけん法如來のお祭と心得兼ねぬ老分年寄が何時も町内の全權を握り。新案禁制諸式是迄通りの制札を立て。附合の組合のと言立て、一纏めよこぬ廻はし。町内輿論なる者が一種壓制の道具と爲て。市民の各自が。我は我たりと云ふ獨立思想。我事をば我がすると云ふ自治精神を撲滅し去るや。固より怪むよ足らざる

る處なり。斯くては社會は沈香も燒かず屁も放さぬお坊さほの境遇は墮落して。人民の智慧と商賣の戰場は何時も不覺を取らよ至ること。道は難き次第なきば。今の長崎の爲めよ計る者は早く年寄老分の天下を破て。少壯者の世の中とすところ肝要なきど。又手少壯者も亦在來の空氣を呼吸して生長せる者なきば。境遇の致す處。感化の及ぶ處。如何も明治仕立ちりとして。社會改良の役目よ保險附とは参らざる可きか。

然り。聊か不安心の代物なり。所謂少壯者も亦是れ長崎と云ふ肩書附の若者よして。肝要の自治精神と進取氣象とを缺く以上は。年寄よあらず共。若年寄と云ふ人物なり。蓋し

渠等ハ天保連ニ比すれば、眼も明かしく、膽も廣からんと雖とも。是れ畢竟長崎一局内の才覺として、大望大願も土地丈での大望大願のみ。進取の氣象と云ふは、百姓が馬で持ち出す島原米を、一駄か二駄か、日見の峠で割よく買ふか、軍艦が碇を下るす早々、大砲の穴をくよつて、洗濯物の受負をせり合ふ位が、精一杯、僅か十六時間で、行き得る釜山港さへ、商賣よ出掛る者ハ二人か三人よ過ぎず、行くを送て、親類寄合ふての酒宴、行て歸て、清正公の兄弟分よ成た様な自慢顔、其了見の細き事、傍で冷汗の出る程なれど、己れの瑕ハ見へぬが人情、長崎以外ハ天下有るを知らぬば、他人のふり見て己がふり直ほさん様もなく、負けぬ氣で世界よ押出す、發心もな

き筈よて、矢張蛙の子ハ蛙の住む井の中然たる、横よも豎よも一里よ足らぬ界内で、幅を利かせるが畢生の本望、昔から拾萬圓の身代がない代りよハ、醜い女房ハ探がしても無いと云ふ、土地柄相應の相續人、丸山の尤物を引かせるか、但しハ又、笠鉾の手際をほめられるかして、開闢以來の能事畢れりと雀躍する位が、動かぬ相場なるべし、扱ハ若者も文明世界第二の厄介者よして、長崎身代の立て直ほしハ、當分覺束無き事ながら、是れも土地氣質の罪致方無かるべきか、長崎氣質の實際よ發露する、最大最著の現象を、諏訪の神事と爲す、此神事や、其式作法殆んと昔の儘よして、笠鉾を出すよも、昔からの株あり、踊を出すよも、仕來りの序あり、町内の

入費は幾何なり共租税同様に出さねばならず。附合の禮表
はいやでも應でも幾多の時間を犠牲に供せねばならず。其
長閑さハ電鐵世界の一珍事として。而して其大袈裟なるハ
江戸京都も類なき程なり。如何にも土地の人が鼻を掛け
るも尤なり。一年の骨休めなれば。出来る丈氣張るも宜しけ
れど。昔の一分も金の降らぬ今日。鬼の世界と改つた當節。古
代氣質で太平樂を爲すも。神事の景氣果して土地の景氣と
證すべきか。果して守護の神意は適ふべきか。棒ぐる幣の錦
の地裏と表を篤と見分けぬ。協ふまじ。元來舊物の保守と
愛郷の觀念とハ。互に主と爲り。客となり。因を爲し。果を爲し
居るものなれば。生娘風古代風の土地氣質を増長さずする品

や

一語千
金盡さ
ぬ贈物

物の可成手輕に留め置き。自慢の種愛慕の源を塞いで。以て
進取の精神を發揮させる方便こそ。大事なる可し。此邊經世
の秘傳ハ。隨分有志家先達の注意を要する所と思はるれど。
自慢ハ土地の名物として。|| お前の知らんおすばん。だ
まつて居んなは。い。コッチヤ構んたい。|| と屹度喰はせる劔
ツクは。是れもみやけの一ツなり。
顧ふよ日本人民も。元和寛永の頃までハ。暹羅へも出掛ける。
臺灣も押出す。隨分多望なる人民なりしが。徳川氏が鎖國
政略箱庭主義の模型はめらるゝこと三百年なるも及ん
で。脱兎が處女は漸化し去て。五洲的空氣の中に投げ込まれ
たる今日も。尙依然卑屈なる氣樂なる。島國根性を得意する

長崎は
かりで
は無い

は六十餘州一般の實狀なれど同じ保守的受働的の氣質も
ても長崎人民の如きハ。他城市の尙武的氣節的の氣質と同
一視す可からざるなり。蓋し日本社會一般の組織として人
間の道義氣節品位が。武士氣質士族根性も因て維持せられ
たるハ。舊來の事實として。平民主義の口上大流行の今日と
雖とも。一國の主とし。一郷の雄たる。政事上社會上道德上。最
も力ある最も骨堅き強硬分子ハ。一ハ士族の階級を離れず。
此尙武的種族こそ。實ハ社會腐敗の洗滌に用立ち。政治機關
の運轉も役立ち居る。最大要素なるが。長崎ハ元來土着の
士族を有せず。舊會所奉行所等の役員も。概ね他方より來れ
る洒落利巧の才子として。武士の眞面目を有せざる者なり

士族皆
無の地

ければ。從ふて強硬的特質の感化を人民も與ふること少な
く。加之是等の人物すらも。幕政の轉覆と共に離散して。跡ハ
ハ單純なる町人とのみ遺ましたる次第にて。由來生活的被
治的一天張の人民なるが上。始終他所の役人衆異國のお
旦那が懷中も依頼せる事なれば。今日一般人民が。政事上の
氣力甚薄くして。縣治も市政も重要なる地位ハ。盡く大村平
戸佐賀熊本等より出たる士族の手も奪はれ。社交上の品
格甚た卑くして。生計の道主として美人機關發達の一事も
是れ頼るが如きは。決して深き因由の無き現象も非すと知
る可きなり。

美人機關發達ハ亦是れ此地の特質として。婦女の品位ハ殆

無氣節
も尤な

んと皆無と謂ふも可なる位なり。他所の人此地よ來れば。必ず長崎は遊びよい土地とほめる。其意味せんじ詰めれば。女が安いと云ふ本旨よて。實際夕暮れの寺の鐘は後家出し鐘と唱ひ。所よ因れば料理屋で近所の娘を呼んで呉る。始末。隣れの肉塊。其相場ハ兎も角も。元方更よ手離し不申等の事は大概の品よは之れ無しとの事なり。尤良家の女子はかか。堅いのが評判の土地。一概よ醜名はかぶせ難からんと雖とも。娘さん方の教育は如何。思想ハ如何。品格ハ如何。堅いと云ふも。堅いハ何の爲めぞ。文明の智識よ富むが故か。自治の精神あるに因るか。大概ハ高等小學も碌よ卒業せず。專一の仕込は遊藝三味亭主のすねかちり。内に引込んだ切で。貞

女を誇る位ハ兎も角も。旦那衆崇拜の遊女氣風よ染み込んで。二等親の玉の輿を隨一の手柄と心得る女性達。幸よして翫弄物的の肉塊よ墮落せざる者ありとも。氣格精神。風教の保護者となる。天然の優美體たらん事ハ。万人よ一人も望み得ざる可し。

請ふ見よ。長崎婦女の眼中よハ。粹人もなく野暮人もなく。唯一の御客さほ有るのみ。異人もなく郷人もなく。唯一の旦那衆あるのみ。性能く親み。亦能く人よ従ふ。四海兄弟の好し。みは便宜次第で結へば。赤髯もお客となれば。深く眞情を致し。南京坊も旦那と定れば。謹て貞節を盡す。生活主義の向ふ處。人種なく國家なく。浦潮港や新嘉坡。舟の底よ隠れて飛ひ出

し。時よ多感なる國粹論者を泣かしめ。物質的の經濟上、需用よ應ずる供給は、唐ピラしやめんの大安賣。中々、世話好きの廢娼論客よ見せ度程なり。臭情歷々實際よ徴すべきが中よ。最も目よ附くと稻佐郷の一區と爲す。此地や十數戸の妓樓と、數十戸の茶屋然たる者あり。平素ハ長崎市の人士が出遊する事も稀なれば、何れも職なく亦用なく。炊煙昇らず、街頭蕭條。其景色秋の野邊よも似たることなるが、祝砲一發數艘の露艦入港すると同時に、黄金の花が咲くと云ふ奇妙な場所。其住民ハ三尺の童子も亦能く露語よ通ずる丈よ。露西亞人が第二の故郷と稱ずる處にして、露艦の碇泊する早々、茲よ上る。上りて下宿する。下宿して一種の産物を賞すると

露人が
神佛の
郷

一種の
女豪傑

云ふ。規定外一種無類の居留地なり。去れば北洋の氷よ封せられて、艦隊の此方よ向ふ頃よハ、今迄凋ほれしやりくり茶屋も俄かよ愁眉を開き、金主も出來る、生娘も買ひ出す。シヤツも着せる。髪も洗はせると云ふ。噪之れよハ追々老功の先輩。亞細亞洲を誇よ掛け、髪のもで大船をつなぎ留める程の女將軍等ありて、采よふるとの事。一寸ハ思付かぬ味の有る場所、かみ占めて見るが宜し。長崎人民一般の氣風ハ以上述る所の如く、兎角不感服の至なれど、之れと同時に亦善き點を有せり。即ち人の温順よして附合よく、信切よして住み易く、商業取引全體よ、信用の十分行はるゝ等。太平の餘意掬す可しとも謂ふ可きハ、眞よ稀

有の現象よしして。滔々たる輕薄世界の別天地。多情の君子を
して戀々去る能はざらしむるもの有りとす。去れば道德宗
教等の點よ於ても。時得顔よ新説を銜ひて。虚譽を吻頭よ求
め。漫よ改良開明を喋々して。一時の流行を趨ふが如き事ハ
無く。却て隱微の間よ身を修むるよ似たり。即ち宗旨ハ概ね
祖先傳來の佛教よしして。禮拜供養怠るなく。佛事の盛なる邦
内匹少なし。耶蘇教ハ隨分久しき歲月の間。播種よ骨折りた
るよも拘はらず。生熟遅々。收穫の甚微々たるハ。實際の事情
よしして。亦以て長崎人民の性情を察するよ足る。現今宣教師
の盡力ハ益熱心よしして。萬策至らざる無きも。佛教徒よ比し
てハ信徒猶見る蔭もなき小數よしして。クロウ宗を以て目せ

られ。威を間巷よ樹つる能はず。之れハ當地の耶蘇信徒ハ大
概佛蘭西舊教故か。多く十字架を胸よ懸け居れば。十字架の
意味なるクロウスともちりて。クロウくと曰ふならんと
思ひしが。或人の説よハ。該信徒ハ皆佛壇等よ燈明を捧くる
事を爲さるる故。冥暗の意義よ取て。クロウ宗と譏りしなり
と曰へり。

佛教の隆盛ハ改めて言ふ迄も無く。四方の山々よ揃比する
寺院の數多きと。寺院よ住する僧侶の夥しきとよ因て。一目
の下よ知り得る所なるが。蓋し是れハ昔耶蘇教の蔓延を防
ぐ手段として。此地よハ殊更念入れて。幕府より朱印免租等
特別の保護を佛徒よ與へて。獎勵を加へし餘響とも謂ふ可

空海上人

きか。其ハ兎も角も。佛教ハ各宗共繁昌なる中よ。取分け真言宗を最盛なりとす。真言宗の元祖空海ハ頗る此地よ有縁深厚にして。港外香焼島の如きハ。空海の唐國より歸朝せし際。香を焼き。行を修せし所也。今尙遺跡を存す。遺跡ハ其他よ少からぬ丈よ。弘法の誓願空しからず。土俗今日尙深く之を崇信し。各町村ハ勿論。殆んど各戸よ大師像を安置し。其祭日三月廿一日ハ。諸宗無得道と主張する日蓮宗徒の外ハ。皆業を廢し。之を賽す。其八十八箇所の札張りと稱して。老婆の各町大師像を巡拜する有様等ハ中々賑はしく。且つ好んで施與する者多しと云ふ。

要するよ長崎ハ氣樂な土地なり。面白き土地なり。降つたと

遊ビ商賣

云ふてハ飲み。照たと云ふては飲み。送別とか寄合とか祝宴とか。何とか岐とか名の附け得る限りハ。飲んで酔ふて。謠ふて。噪く種と爲さるなく。一寸の事よ町家よ藝妓を呼び婚禮杯言へば本式本禮立派な獻立大きな料理屋を借切て。二重三重よ客を饗し如何なる公けの儀式で御座れ。譯の分かるも分らずも。一切飛び出して。得意がり。天長節でも憲法祝でも。何でも天子様のお祭と唱へて。噪き立ち。踊の俄の町内揃ふての豪舉。天下晴れての御愉快ハ。一日で濟ます。二日も三日もはね廻て踊の祝儀で又飲み直ほし。祝の又祝。迎酒の又迎酒。五日や六日打流して。うかれる事ハ珍しとせず。甚きハ墓所で酒を飲み。行厨を開くと云ふ様な。遊ぶ方ハ

至極念の入た土地柄。且つハ既ニ述ぶる如く。非常ニ神佛ニ凝る風習故。神事祭禮。年中の大事と有れば。其熱心なる事。皇張なる事實ニ話の外なり。

四時の遊山祝祭は。先つ正月の年始の様ハ各地同しければ言はず。三日の頃より十日後迄も。日毎七高山参り迪盛大なる執行あり。是レハ市街を繞る山々の内。七箇所の社堂ニ賽するよて。先つ無凡山金毘羅堂を始めとし。絶頂より下てハ隣の山ニ登り。又下りてハ。又上る。七面山秋葉山不動山彦山娥媚山都合六個の高山を経歴して。最後ニ愛宕山ニ來る。のとす。何れも峻峻なる山陂を攀ち。壁立せる斷崖を傳ひ行くを以て。老幼男女皆草鞋掛けよて。終日を期して遊ぶを常

七高山参詣

宛然太古の景

とす。固より参詣は全くのダン。酒の力で神代の心地となるが本望。左なくば出雲の神を引張り出し。手短か裁判をさせ度念願。禰子も釋子も心ハ一つ。兩の眼もトロ〜機嫌。瓢箪肩ニ千鳥足。前に一客を追ふて。村酒を強め。傍に美肴を認め。土席を鬧がす。一步一吟。一笑一酌。綺羅時ニ谷風に縦かへり。紅絹忽ち雪膚を現はし來る。少女の足ハ草鞋ニ噛まれて重く。佳人の脣ハ生酔ニ逐はれて輕ろし。路傍谷間。所嫌はぬ酒宴。十里の山徑。行きも切れざる人出。其趣や悠々たり。其樂や陶然たり。藹乎たる溫柔郷。武陵の光景。其儘なり。如月過きて。彌生の花盛りも。花見迪ハ餘り出ぬ。丁度櫻の咲き初める頃より。風遊ひの大會有り。里俗風を稱してハタ

と曰ふ。之を揚ぐるよ、ガラス缺けを塗り付けたる糸を以てして、互に相闘ふを樂と爲す。ハタ揚の大會。一が金毘羅、二が風頭、三が合戦場よて。各一週許りを隔て、行ふ事とす。金毘羅山ハ公園の裏手、二十町許りの高丘よして。即ち無凡山是れなり。金毘羅堂有り、古來支那人の歸依多し。風頭ハ公園の眞向。合戦場ハズート遠方。招魂社の先きの山なり。此等の山々よハ。何れも前日より、茶店よし、賣張等を出し。且つ遊山の人ハ竹杯以て、場所を圍こゑ置くものとす。扱當日よハ。早朝より人々寄り集ひて。各自凧の切り合を始む。空中よ舞ひ上がる者。翩々飄々として、幾百張の數を知らず。一張一弛、秘術を闘はし。一擒一縱、手練を極む。飛んで雲よ入り。切れて霞

大人の
凧揚

よ没す。杳乎として窮む可からず。掛け聲、呼び聲、鬨の聲、勝ても負ても大叫び。黒山ハ人の頭で益黒く。青空ハ紙鳶よ填められて青きを見ず。崖も麓も。ギッシリ、身動きならぬ程の人數。かこひの内ハ用意の行廚、開てグイ呑み。立て亂舞。藝者と角力。樽を太鼓。果てハ切れた紙鳶の奪ひ合。ペラン酩酊、デロレン險。勇さままし共謂ふ計りなく。賑はしきハ言葉の外。眞よ一種の奇觀と稱す可し。

凧揚の次よハ、祇園祭若宮祭等あれど。何れも格別の事ハあらず。燭り此地特有の珍事ハ盆會の聖靈祭とす。其模様大方左の如し。但し下文ハ長崎土産と題せる舊書より拔萃す。處よ係り。弘化天保頃の景況を記せる者よして。時勢の異な

守舊の
一端

今日を以て同一様なりと謂ふ可からず。例へば諸吏ハ多く上下と着して参詣する杯。現今ハ之れ無キハ申す迄もなき事ながら。大體の風習も至てハ今も昔も變る事無し。

聖靈祭ハ例年七月十四日十五日なり。同十三日の晝後より家々別々壇を設け。其上ハ鉢の編かみたるをしき(名づけて聖靈鉢と云ふ)。佛間の位牌を移して立并べ。是を聖靈棚と稱す。代々の諸聖靈。此夜の丑の刻を待て。我家々入り來るとて。婦人女子圓圓盛饌の設けをなし。門ハ家紋をつけ。大なる燈籠を挑ぐ。これを門燈籠といふ。古風を守る家ハ。深更も至るまで。戸を鎖さずして之をまつ。頑愚老嫗の輩ハ。實ハ亡者の十萬億里の淨土より艱難辛苦して來ると思へり。又柳經やなぎのへと云事あり。雲水の僧。諸宗の比丘尼等。案内も乞すして家々突入して。靈前みたまの前に向ひて誦經す。名づけて柳經といふ。是許多の布施物を利するもあるのみ。同十四日種々の佳饌を設け。朝夕靈

支那の
聖靈祭

前も供ふ。尤料理ハ皆人先祖よりの仕來り有て。老婆などある家ハ堅くこれを守て。古式を變する事なし。扱此日申の中刻頃より。男女各行厨を携へて墓所も至り。酉の刻ごろを待て。燈籠を塔前も挑ぐ。一所の點燈或ハ三十或ハ四十。新死の家ハ百餘燈もいたる。是親族知音の贈る處なり。墳墓ハ預じめ燈籠掛をしつらひて。これを掲ぐ。諸吏ハ多く上下を着し。商家ハ平服もて参詣す。小家下賤の輩ハ。塔前も鎗を展べ。毛氈を鋪て。酒宴を催し。相共も拳けんを打て興を催す。凡て長崎の地ハ山々相環り。其もとの皆梵刹相連なる處ゆへ。數多の墳墓も萬燈を點したるさま。他邦も比類なく。因て羈旅の僧俗一たびこれを視てハ。各奇觀と稱せざるなし。扱戌の中刻ごろも至て。山々數萬の點燈漸々も消滅し。人皆山を下りて家も歸る。因て墳墓點燈の間ハ。老漢阿婆の家を守るのみ。又諸國遍歴の僧侶。廻國六部の徒家々の門も立ち。鉦を叩き。木魚を打て。回向し。念佛の聲かまびすし。

墓前で
拳を打つ

同十五日。魂祭り并墓所參詣十四日の式の如し。此夜丑の刻に至り、聖靈流しあり。預め竹を撓めて、船の形を造り、麥藁を以てこれをつくり、潮水の防とし。帆檣を立て、白紙をつぎて帆とす。帆は極樂九西方丸、弘誓丸、淨土丸、或は六字の名號七字の題目、各宗旨を隨ふ處を以て大書し。又は觀音地藏の像を畫き、四更の鐘を聞て、皆茶を煮て、靈魂を供ふ。通俗之を三番茶と云まざる流し送らんとする前家々かならず煮て供ふるなり。暫く有て、供物の湯圓菓實の類悉く壇上よりおろして、藁船を積み、舳艫は數十の竹の筒を設けて、線香を立つ。種々の燈籠を小さき繩の上へ挑ぐ。吏人巨商の家は奴僕これを肩よし。貧賤のものは父子兄弟これを昇で、海濱へ送りゆく。素より船具の設けなし。風を任せて飄蕩し。水面を走り出づ。恰も船の順風相送り、洋中へ漂ふが如し。通俗これを聖靈流と云ふ。町々小家下賤の輩は家ごとく舟を造らずして、近隣町内もやひて、巨船一艘を製作して、相共

佛も浮
ぶべし

供物を積み、家々より燈籠を持出て、舳艫帆檣等もまたの燈籠を挑げ、外へ造り物をなし。船の先へ立て、町印とし。途中雙盤を叩き、鉦を鳴し。同音念佛を唱へて送る。其聲喧しくして、乳兒もこれが爲へ睡りを覺す。いたる通衢觀る者堵の如し。流し場は多く大波戸なり。見物の男女兒輩肩をすり、群集をなす。新死の家は若聖靈と稱し。舉家名残を惜みて五更に至る。前後の賑ひ曉天よいたりて止む。

此等の施行は、何れも陰曆を據り度は、一般の願望なれど、今は酷暑を及へば、惡疫傳染の患有り。迪警官の説諭よて、新曆を據らしむる事なり。且つ雜沓より生ずる危険を防ぐ爲め、聖靈流しの船にも制限の出來て、昨年來は皆々手輕に、翫具然たる小船を以て、間合するに至れり。

諏訪の大祭

最後よ來るは諏訪の祭禮なり。之れぞ長崎の最大事、士民畢生の本願。若きも老いたるも、活きて居るは只此れが爲め。一年の膏汗も、此一舉よ流し込むと云ふ程の盛儀よして。年の舊曆九月七日菊の節句の兩日を祭日と爲す。此中休みよ一日を隔る杯は、精限り根限り、言ふ可からざる激昂を爲す事なれば、至極必要の工夫とも謂ふ可し。今其概略を記さん。先づ長崎八十餘町を七分して、各十餘町を一組とし、順番を定め、年々一組毎よ、祭禮を引受る事とす。其番よ當る町々ハ、神前よ踊を獻するが主要の役目にして、三四月前より稽古を積み、準備を整ふるものとす。抑廟前の踊は、寛永の十二年丸山町寄合町の二華街より官廳に請ふて遊女を出し、猿樂

神事の次第

の曲舞、或は小舞を爲せしが、濫觴にて、これより後諸町之に倣ふて、兒子をして種々の踊を、催に従はしむるに至れる次第なるを以て、今尙祭事の魁ハ、兩華街よして、丸山寄合の兩町互よ一年置きに、十餘町の組よ加はる。踊兒ハ町よ因て藝妓舞兒を雇ふもあれば、各自の子供を出すもあれど、何れも殊更よ師匠を頼んで仕込む稽古も積んで、祭禮前數日よ、衣裳着せ、迎、本装束以て踊の下調らべを爲さしめ、同時よ庭見せ、迎、小庭を奇麗よ飾り立て、座敷よハ踊の装束諸道具を陳列し、且つ兼ねて、秘藏する屏風懸圖等を排置して、互よ相誇る習なり。

庭見せ

いよく當日となれば、未明より踊を出し、華街の分を眞先

笠鉾

として引續き順を逐ふて、社前の坂下よ詰め、各笠鉾を備へて、踊の連中之よ従ひ、天明を待て、和居居る。笠鉾とい竹を組んで五尺桶の大きな笠を爲し、羅紗天鷲絨の屬を用ゐて之を蔽ふたる者よて、周圍よハ下がりと云ふて、人物鳥獸花卉樂器を縫箔したる、美麗なる切を垂れ、臺上よハ、ダンと云ふて、町名よ因みせる意匠の種々の造り物を載せ、之れよ各自の町號を大書し、大力の男、下ガリの中よ入り、軸を持って踊の先よ立つ。踊の後よハ、各街の人々、美服盛粧揚々として附き従ふ。社頭長坂よハ、市内の無頼、白筒袍ちやうとつぽうと稱する者、或は破衣、或ハ短褐、或はシヤツのまゝ、或は席を纏ふて、雜巾の如き手拭を頬かぶりして、警吏通行の細道を明けたる外、ギツシ

見物人
夜から
詰める

りと詰り、何れも夜の一時二時頃より、兵糧を竹の皮よ備へて、かちり乍らガヤ／＼言ひ居る。坂の兩側、坂下なる廣前の兩邊ハ、何れも機敷をまつらひ、之れよ見物人ハ提灯をともし乍ら詰める。近傍の茶屋料理屋ハ皆銀燭を輝かして、景氣を飾り、崖の上機敷の下、錐立つ地なき迄よ人込なり。何とも知れず、只ツヤ／＼と云ふて、四時も過ぎ、五時頃よなりて、東がシラ／＼、白んで來ると見れば、忽ち奏樂一聲、群器を鎮めて、華街の笠鉾よ／＼と廣前よ出る。出てよ、一振り二振り振れば、白筒袍等の喝采雷の如く起り、立歸らんとすれば、持て來い／＼の聲起り、顧みて更よ振り廻はせば、又喝采を博し、十分の面目を擔ひて引込めば、跡より直よ踊臺を

持て來
い／＼

出し。舞妓數人神前より一禮して起て舞ふ。師匠出せくの嚴命。白筒袍より下れば。師匠も出る。はやし方の藝者も出る。何れも地上より坐して歌曲を奏す。時將に曉氣爽かよして。心地何となく清きが上よ。鶴裳紫袂。翩々として軽く舞ふ事なれば。一見快絶。天女の戯かと皆人我を忘れて見物し。此時ばかりに慾も徳も離れて。眞實神の前に出た様な氣持よなる。ならぬ人物でも。天國の天使のと云ふ事は。此邊から割出した算用である。位の感覺は大丈夫起る程なり。華街が濟めば。次番々々と踊を進む。何れも相變らず。笠鉾を先にふり廻はして。白筒袍のおほめに預からんと氣張る。其有様寧ろ兒戯よ類すれど。土地の風習實に斯く有らしむる也。

有難し

妙名産

抑白筒袍組とは皆博徒遊俠の群よして。平生の産なく家なく。もぐりよゆすりを職とする輩なれど。諏訪の祭禮に限てハ。黜陟褒貶の全權を神授けよ授けらるる長崎一種の名産なり。渠等がほめれば。町内の鼻が高く。渠等が囃やさぬば。丸で名折れと爲る。渠等が踊の所望ハ神勅と心得ねばならず。渠等が投する手拭や紙の纏頭は。三拜九拜して推戴き。持て歸て。自慢の種と爲し。夜よ成て。酒や金を御返禮申さねばならぬ仕組よて。實情踊は白筒袍よ奉納するも同然。以前は此三日天下の新神どの隨分無理な御注文も遊ばし。手ひどい御慰みも爲されたるが。今は白筒袍も。白服の警吏も。睨まされて。時折は。つかみ出さるる事なれば。神威一向よ相立

白どの
はう大
明神

笠取れ

たず。藝者を裸よして踊らすの。握飯の上に坐わらすの。
と云ふ事ハ相協はざと。今に褒貶の役目丈ハ專賣特許な
り。外ハ一種の役目あり。如何なる故か。社前ハ、兎角笠傘を
嫌ふこと甚しく。南京坊杯が土地の風を知らず。蝙蝠傘を
かざす事度々なるを。如何に離れ居りても。能く見付け出し
て。笠取れ傘取れと。一人小聲よ言出せば。低聲漸く強く。一聲
又二聲。加はり加はつて。終る巨濤の如き重き響を爲し。其命
令を執行させぬば。己まぬ事なり。面白しと謂ふべし。
踊る種々あり。今様本踊の優美なる。唐人踊の諧謔なる。獅子
舞の古雅なる。薩摩踊の雄壯なる。狐竹昇踊の奇矯なる。町々
の趣向一様ならず。シヤ切りダンシリ。笛太鼓。喇叭に三絃。笙

若
い者
よ
毒

よ鐘。一曲又一曲。うれくの曲は應じて。拍子立て。奇絶妙絶。
誠よ揚州の幻化。歡聲の天地を動かすも宜なり。機敷の足は。
雜沓で警吏を當惑せしめ。屋根の上や木の膝。何處の隅も見
物の頭で塞がる。願はば。我も人も朝餐を喰はず。空腹さへ忘
れて。一心に見詰める。腹の中でハ。築町の衣裳がよいの。興善
町の稚兒が見事だの。大黒町の思付が妙だの。或は又愛吉の
藝筋ハ宜しいの。やつまのセリ符が宜しいの。おたぬの舞ハ
軽ろいのと。様々な感心ハして。之を言出す隙も無く。花の
娘や。月の稚兒。跡からく。面白い踊の据。膳箸把る手間の
忙はしき根をつめて。眼もとろく。飲まぬ酒は酔ひ。正氣で
氣狂ふとハ。此際の情味なり。其れも其答。仲山よ金の掛つた

其れを
只どの
得用也

ことハ、丸山藝者を三百六十五日、總揚げした處の噪でなけ
れバ也。

踊りの
場所

社前の踊終りて、諏訪社の三神體、御旅所と唱ふる、大波戸の
假殿より渡御す。神官數人馬上より附添ひ、幡と鉢と寶錢箱と
ろくろの行列、鄭重を盡し、供俸の人數は幾千人と云ふを知
らず。通り筋の家々、竹を立並べ、簾を垂れ、幕を張り、座敷を粧
ひ、美酒佳饌を設けて、賓客を饗應す。辻々ハ、男女老弱、嬰孩
を抱き、童稚を携へて、視る者堵の如し。踊場は舊例を守り、諏
訪社前の外より數所あり。即ち大波戸より祇園、伊勢の宮、三箇所
なり。一日を隔て、神輿御旅所より還御あり。途上の光景、社
前の模様、殆んど前日の如く。遠近の士女、田夫野嫗、肩を摩し

之れを
バかり

膝を接して、見物するの形況、言語を盡くし得されど、先つ
く、諏訪の神事ハ、京の祇園より吉原の俄をかけて、其れを三
でわつた様なものと、こぢり附けるの外ハ、無し。

諏訪の神事を見ぬ内ハ、長崎の話が出来ぬ、とは實際なり。氣
風も性情も、習慣も、風俗も、皆此祭日は觀察し得て、餘り有る
べし。其形況を敘したる丈で、長崎土産ハ、澤山なきを、終り
臨んで、モ一ツ言語の様を察するよ。所變をバ品かわる。關
東者の耳ハ、隨分妙に聞こふる節のなきハ、非ず。中より、拔
天(ケレレの意)の濫用等ハ、餘り褒め得されど、少女杯よか
らかふ口の下より、袖打蔽ふて、輕ろく、疾やく、やさしく、だま
され、マッセンたい、と、忽ち顔を背ける邊ハ、憎からず覺ふ。蜀

だま
れん

山人の狂歌よ。

長崎の山の端よづる月の善き

こんけん秋ハエツト無ばい

(意味) 長崎の山よ出る月の善いこと！ 此様な秋ハ滅

多よ無い哩

又里俗の流行謠よ。

おんだいやー、そんけんしますなばけしとつたい。

どういふ此人な、餘所はしもんじやるか(ホーカイ)。

おんどが青餅あ、外よある、外よある。

あんたすかぬ

(意味) 私ハいや、そんなよまますな、人を馬鹿よしてサ。

長崎言
葉の謠

之れに
増たるに
土産な
し

んなよマア此人ハ、いやらしいだるか、私の意中人
ハ外よあります、お前ハいやだよ。

是れで一斑ハ分れど、一片でハ、カスラーも土産よならぬ
と同じく、長崎言葉も此儘でハ、遣ひ物よ出来難し。イデ一段
の物語を綴り出さん。

●山の三軒屋の娘を、海うみの細ほうか時ときあ、幼少ちいさの時ときりアンタ達
や知居ちいるなり？ お民嬢おんぢやうて、(お民さんと云ふて意地のこるう
して、どうもこうもならんじやつたばな(仕様が無かつたわチ)
ブラシキ〜どもすつと(でもすると)エツトぶんなはんな
目の舞まふテ、ちうけんで(餘り振りなさん、目が舞まからサと言ふ故)
止やむと又、マツトぶんなは、面白おもしろか。云いふてぶらする。うふ

すつとめんく打遺て(そふすると自分で墜落ちて)シヨく一
 本失ふて(草履かたくなくして腹かいて、おんど達よ悪たふ
 (怒つて私達よわる口いふ家サね歸て。紅どもつけて、立派な髪
 さし(簪)どもさし度ちうて。ぐぜつて。お母よ叱られて泣き
 べス子べス。又公園サね出て來つと。縣令さほの方の畏ろ
 しい太うか犬よ吠いられて。ビツクリして、杼面棒ふるも
 んけんて(あはてるものだから)じゆつ田圃の中へ(じゆくくし
 た泥路の中)逆とんばよ倒れてくさな。泥くさめよ成ても
 かんまでな泥だらけよ成ても構はないでせ。顔ハせんきうの無
 かと好奴ばつてん。ノー、(顔ハ菊石がないと別品だけれども、チー
 アツテ又。世の中あ、不思議なもんたい(其れでもサ世の中ハ分

らないものだよたしかお民嬢の十六の歳じやつたらう。あ
 の痛ふでばし、居んなはるか。色目のエツト善なか拔天。な
 かくよか男の(あの病氣でもしておいでか。色つやが餘りよくな
 いけれど。中々男振りのよい)松本をほてる云ふて。何でも旅の
 役人けなたの(松本さんとか云つて。何でも餘所の官員さんとかで、
 チー)其何が。お民子ば、嫁御さんよ貰ふちうて。お母と話し
 合ふて。一とき主の宿よ呼ふて置きなはつたばの(其人が
 お民さんをお嫁よ貰ふツテ、母氏よ話して。暫く自分の宿よ呼んで置きな
 すつたり、チー)そふして、又聞きなんせ。お母ハ高ぶつて、歩行
 きなはつて。途中で(お禮をしたつちや。物も言ひなはらん
 とばの(ソレからママお聞きよ。母氏の鼻を高くして歩行くこと。途中

で御辭儀をしても、物も言はないのだよ。▲ア、いや、モ。どういふ
 餘所しもんじやるか。●見なんせ、程を知らんと罰かぶる
 ばの(御覽程を知らない)罰が當るから)まーだ祝儀もせんとよ。
 チンチ迄持てから、そして嫌はれたバの(まだ婚禮もせんの
 よ赤ン坊まで持たされて、そふして、出されて仕舞つたわチ)お母ハ中
 々腹の太かけんで。||よかく、よかじやなかな、エツト急
 がんなはんか。||ちうて居た拔天(母氏ハ中々腹がシツカリし
 て居るから)イーサく、イーヒやないか。そんなよ氣をもみなさんな
 と云ふて居たが)符の善か時あよかもんで。(運のよい時ハ、よいも
 のでお民ちいはず)此間。稻佐のお榮さんの方へてる。お
 松さんの方へてる。加勢よ行居る内(ツイ此頃。稻佐のお榮さん

の所へとか、お松さんの所へ手傳よ行て居る内)魯西亞のスケンペー
 てる云ふ、金持の洋人よ好かれて、ノー。どうして!家バ
 建てよやるけんて(スケンペーとか云ふ金持の西洋人よ見染められ
 て、チ。其れい〜!家を建てよやるから)おかよも呼ふで置け。
 錢ハどれ程だつち、や入用丈やる云ふて……………▲ホンナ
 事な? ホンニの? ウニレバイチ、(ホンナ事かい? ホンとよ
 かよ? ウー、ナーニ。)●空言な、行て見なはれ(うそなら行て御覽
 ▲行かなまた(行かなくつてサ)●こればつかりハ空言じや無
 かばの。人の心ハ合縁奇縁たい。▲ナシナ? (なせサ?) ●アッ
 テ、又。この人あ、お民ちいバ見なはれ。今言ふとるじやんか
 ン(アレ又。この人ハ、お民さんを御覽な。今話してるとやないか)▲オト

ライ、テンキヨウ、グールバイ。(オールライト、サンクユウ、グールド
 ハイ) ●往來の點灸ちうい。どんげん事すつとなり ▲どんげ
 ん事ッテ。テンキヨウバ知らんとなり(どんな事ッテ。テンキヨウ
 を知らないの?) ●知らんと(知らないのよ)▲アッテ。宜しい、大き
 ゃあなた。さようなら。云ふ事ば。今おんどの言ふ如。洋人
 の言ふじやんかな(ダッテ。宜しい、難有ふ御座います。さようなら。と
 云ふ事を。今私の言た様。西洋人が言ふじやないか) ●そふな！お
 んだ又、南京の如。好々と言はふばい(そふかいー私の又南京
 坊の様。好々ッテ言はふや)

此はか。父をおとく伯父をおつちやまと云ひ。蛙をどんくたらひを面盆、
 幽霊を幽れんど呼び。お神さんをお神さま。氣障な奴をスカンピーと稱

し下さいと云ふ事を仰付けまつせ、ぢれたいを齒かゆサ、うるさいを
 せからし、又やせくるしと曰ひ、世話しいを八釜しと叫び、噪ぐ事の噪動
 つかす。さんくは悪評する事の茶ッ茶くさら言ひなはると申す。

●之れハ鬘斗の代りよ。お負けとして相添は進呈仕候以上

右の一段を翫味せ。或ハ語と情とを致す。庶幾からんと
 雖とも。音調の一種異妙にして。且つ變。支那人臭きの點。よ
 至てハ。到底區々たる死文字の能く寫す處。非ざる也。
 言語。限らず。渾べて支那人臭きの點ハ。頗る注意を要する
 處にして。九州の中。此土地丈ケハ。一風異なりて。頗る支
 那然たる處多しとす。是れハ。畢竟數百年の昔より。彼の「珠
 ほうつき砂糖ハ土の如くなり」と云へる。唐船のお蔭を蒙る

事深く大得意大旦那支那人に限りしのみか。僧侶なり、學者なり、歸化して功を成す者さへ少からざる。自然に其影響感化を受るも無理ならぬ次第にて、今に於て一般士民が支那人を尊重し、下等の辮髮奴に至ても、アチヤさんと唱へて、曾て輕蔑するの情莫く、敢て其妻妾たるを嫌はざる如きは、其間、同情類感の相存するに因て然るならん。例へば又會席料理、ゴタク喰はれぬ迄并べる如き。且つハ豚肉や乾海鼠を珍重し、寒天や小豆、ごま豆腐を賞美する等ハ、他の都會に稀なる處にして、而して此土地獨り此風を有せる如きも支那人の好尚を移し來れるの故に非ずして何ぞ。殊に中流以上の士民、戸毎に月琴を彈し、清笛を弄する如き。所

支那人の勢力

謂流行謠なる者ハ、概ね支那人の樂調に合する性質なる如き。或ハ又酷た喪祭の禮を重じ、死者を哭する風習の如き。否、一切保守の氣風を帶る如き。緩漫にして規律なく、時間の價値を知らず、期限の必信を守らざる如き。何れも支那化の勢力を見るに足る。支那化々々々、亦是れ此地の特趣有る一異境たる所以の一原因なり。

陶器商店
マツチ製造所

卷尾に、著者謹て疎漏を謝す。疎漏の廉一ツハ工業の事狀に就て、香蘭社と田川燐寸製造所の記載を抜かしたる事なり。香蘭社の出島に在り、肥前陶器の製造及び輸出を取扱ふ商店にて、製造所の有田を本據とし、深川氏の有する處、製造の巧なる、遠く佛國を歴せんとし、支那への輸出も數夥し。田川燐寸製造所の春徳寺の下に在り、需用元の當地の八九分と、九州各地を

占め、外國輸出の清國を第一とし、魯領浦鹽港、及び朝鮮等なりと云ふ。此二者の當市工業中、較著るしき現象として、進取的分子を合ひ上より言へば、未頼母しと謂ふ可し。

三社

今一ツの神さま係り。長崎の三社と申す事を落したり。三社の諏訪の社と、松の森天満宮、及び伊勢町大神宮之れなり。總體神佛に敬禮を盡す土地の習なる中にも、此三社への人々特に崇拜を加へ、社前を過る時より、多く冠り物を退る程なり。

此外、あれも出せ、これも書けど、追々注意を促かされたれど、紙數限あれば之を省き、先つ病魔退散の祈願を籠め、神の御條よて筆どめ。

めでたし。

長崎土産乃後ふ書 (初版跋)

どうもサツパリした、氣の廣い。彼人からバお金を持たせ度と、陰で謂はるゝ程の男に限て、屹度金に持てぬ。ほんに感心な、能く萬事を行届く。此人こそ未頼母しと、雌さるゝ様を秀才の、多病で無い例の、無いか有るかの、如是色心惜しくは、あらじ、今此三界、無数の我子を濟度し盡さんと、殊勝な、發心、思ひの海の一滴を、注ぎ初めたる間も、荒磯の、瘦野に、残る菊一株、霜に傲るは、めづらしと、褒めらるゝ程の不仕合、咲くか散るかも、昨日の夢、醒めても、追れぬ成住壞空、四劫三災、さんく、さ目よ王法難、難でも艱でも、厭はぬと、心の、勵めど、如何よせん、勵み果はせぬ身の病、病仙と名乗て、忍ぶ崎陽の空、餘儀なく捨てた戀しき浮世、其荒浪を、餘所よして、深山の奥に、唯一人、海霧へす力も、まばし松の風、聞くさへ耳を塞がんとす、無理壓制の手細工、悟り、開いたと言ふ内、また閉ちる事の、有る證據、碁も飽きたり、將碁もイヤ、本も感心せず、歌牌も面黒し、山も川も珍しからず、茶屋も藝者も相手よならず、ト曰ふて、世間の如何に、文明開化でも、傍で看病がして見

度と拾萬兩の持參金で。流行謠を實行する醉狂小町も無さそうあり。矢張寢て
ろんだなりで。下界を見渡す外も。所作の無き名實相應を喚霞病仙。嗚呼イッ
ソの事。相棒の久米叔父見た様な。氣樂者も生れて來たが善かりさ。一旦の歎
こてど。更も又。枯木頑石の無きにも劣る。一寸の出も五分の魂。我に凍然た
る。天も掛つて寒さ心の一劍。已みなん。我こそ天地も斯くの猜まる。程
程の因果も生れ持たが病の剛銳快利。島の日本に餘されるも尤ぞ。思ひかへ
して。瘦我慢此場も成てもやまぬ自惚。鏡ようつる森羅の影。萬法の假なり空な
り中され。中道にして已むも亦妙なれ。一心を攝して乾坤を消め。動かす
して能く平生の志を成すと謂ふもの。吹かば吹け風。降らば降れ雨。向ふ任せが
究竟の秘訣と。刀頭元へ蛙の了簡。井水海潮共。是れ同一源理の硯の水。乾して
且く閑を消せる。此れも亦無量曠劫中の一時ある可し。

己丑重陽前三日

病

仙

長崎土産と讀

丈夫曠世の雄圖を抱いて、事業の衝を馳驅する。其間一起一
落、天の數奇を悲んで泣かざるの涙、豪懷に濺ぎ吐かざるの
血、壯襟を濕すの事、固より一よして足らざる也。然れとも百
無聊千不平、曷ぞ身二豎も扼せられて、志業蹉跎暗愁慘愴。形
影相吊ふの一失意も若かんや。古より英雄を恨殺する、實も
之を以て最甚と爲す矣。

日本の一書生、天眼子なる者、曾て獨尊子護國之鐵壁等の諸
書を著す。海内喧傳、皆其奇筆を稱せざるなく。天眼子終も奇
男子の名有り焉。而して奇とせらるるは、即ち名の在る處也。

して亦禍の伏する處。天眼子忽ち當世の忌諱を觸れて、獄に
下さる。

四

天眼子吾黨と志を同ふす。吾との交情一掬の相秘する者あり。吾の去て清の中央に遊ぶや、風を訴へ雨を託し、旅愁を吟咏に附する毎に、思天眼の身も及ばざるなし。一別忽ち五星霜端なく其入獄の報に遇ふ。情々の情何ぞ堪へん。日は石川島邊の慘雲を念頭に畫き、東天を瞻望して悵然爲す所を知らず。蓋し奇筆奇禍を買ふも亦男子の事たるを失はずと雖とも、天眼是れより先き、咯血を患へて餘衰未だ治せず。蒲柳の質、囹圄の苦に任へざるを恐るゝなり。

客歲初夏、吾清國より歸り、崎陽に留る數日、天眼の病を此地

に養ふを聞き、直に馳せて之を訪ふ。就き見れば、則ち憐むべし。病骨床の上に臥して、蒼顔土の如く、凄笑纒み、再會の喜を敘す。吾一見悚然、深く其前途を憂ふ。且つ其經歷を説いて、僅々八月の入獄、人生の最小波瀾と謂ふと雖とも、爲めは肺疾に陥らしめ、不孝の子たらしむるに至る。俗吏の大道を害するも亦大ならずやと曰ふに至る。覺へず流涕、痛く天道の無情を歎す。終に俗務を促されて、戀々思を遺して去り、關東より北越に入り、又北海に遊ひ、京坂に還る。其間夢寐にも心、天眼を離るゝ無し。

今春、事を以て、京坂より中國を経て復長崎に至る。至れば、則ち天眼先づ吾旅館を訪ふ。音容頗る健如。坐未だ定らず。衣を

五

六
披き其背と胸とを示して曰く。仲卿見よ。爰點六十日。一時の
小快を貪るを得たり。活物の治術ハ機と變とを利するを尊
ぶ。癡軀を焼いて、輕快の機を轉す。姑息の策も亦時として取
る可きハ非ずやと。吾手つから之を檢し。且つ其生氣漸く身
は復するを認め。欣喜湧くが如く。相對して微笑嘿坐する者
之を久ふす。

既にして吾問ふ。此地人物の有無形勢の通塞を以てす。天
眼笑て答へず。一卷を懷より取て。吾も示して曰く。是れ喫霞
病仙の作る處。長崎みやげの一書なり。一たひ出て。崎陽の
紙價を貴からしむ。今や再版の舉有り。卷中の朱書ハ皆増補
訂正の箇所と爲す。一讀忽ち長崎を腹よす可しと。吾喫霞病

仙の天眼の變號たるを知る。故も亦笑て之を受く。更も相話
する多時。終も天眼を門よ送て。而して其贈る處の書を讀む。
果して其筆力流暢健快。一氣の中も崎陽全市を吐き來て。奇
味嫻々人を襲ふを見て。心竊かよ天眼の餘銃未だ挫けざる
を賀す。

願ふも天眼何人ぞ。渠曾て文字の人物を腐すを慨し。中途よ
して學校を退けり。渠曾て書籍の識見を殺すを憤り。盡く其
所持の書を破れり。而して今ハ則ち書を作り。文を活る。其れ
或ハ其天真を狂けて。滔々たる流俗よ化し。一個の文字崇拜
漢よ墮落し去りたるか。曰く否。五年の日月渠を驅て文字の
價値を知らしむるハ。蓋し之有らん。渠が文弱界よ朽敗せる

と云ふハ未だし。抑天眼の文章ハ曾て文字的彫琢の上より來る者ニ非ずして。一ニ識見と眼光との影像のみ。故ニ通篇詰屈難澁の處なく。古語熟語の以て其學識を衒ふ可き無し。却て平易淺近の語を連ねて。千里滔々。多曲多味の文と爲し。微ハ穿て。社會の皮肉ニ透り。細ハ開いて。人情の最奥ニ達す。而かも且つ。纖巧ニ落ちず。輕薄ニ流れず。微妙の間。一種雄大の氣。疎放の風を失はず。時ニ尋常一片。人目と惹かざるの俗辭を活用して。奇警又精刻。隻句の間ニ。無量の感を含ましめ。懦夫の膽を破らしむ。以て實際的活用的の能文と稱するニ足る者ハ。其人誠ニ章句の奴たらずして。氣と識と文字の上ニ動く所以の者有れば也。長崎土産の一書記する處市井の

瑣談ニ過きず。論する處往々卑俗ニ涉るの嫌ありと雖とも。其文の炯々洒々。八面玲瓏。一貫萬通なる者。以て天眼の天眼たる所以を證し得るとせば。假令君子の愛顧を博し得ざるも。其れ豈ニ江湖活腫的の知己を媒し來るの益莫しとせんや。吾の此書ニ於て喜ぶ所の者は。於てか益加はる矣。然りと雖とも。天下の一有骨兒を以て。一朝空く病魔の擒と爲り。筆硯の間ニ強いて自寛よし。永く崑崙の月長城の雪ニ孤負するを致す。天眼の今日曷ぞ多恨の地ニ立つ者と謂ふ可からざらんや。嗚呼天眼の多恨の地ニ立つ所以を證して。而して其平生の相識をして。轉た惻隱。剛腸爲め。萬斷せしむる者ハ。亦此一書なり。此書の成る。賀せんか。將た吊せんか。

試みよ之を崎陽の山川に問ふ。山川應へず。只瓊浦々上、幾船の氣笛頻々活機之急を吹き、娥媚山頭、半輪の寒月徒々遊子の骨を射る有る而已。

於崎陽客舍

井深仲卿謹草

長崎土産を讀んで天眼ふ寄す
書いたく。半死人のくせふ、分外の事まで書いた。丸山がどうの、藝者がどうのと。大膽な筆法。偽天

眼か。但しを歌人坐して名所を知るの見識か。イヤハヤあざれる外無し。實をあたらし男兒を俗才子に過去帳ふ載せさせぬ可と。内々婆心も有るが。再思乃後意氣豁如。先づを面白くして止めて置く。「鐵板ひく弓取、出ると。猛り世ふ。時節が時節、折角御用心々々々。

東都日本橋魚川岸

佃 信夫とるす

逸事

〔長崎縣長崎市新町四番戶新街活版所印行〕

明治廿二年九月三十日印行 同年十月三日出版御願

同年同月廿二日發行

同廿三年二月二十日再版御願 同年同月同日版權御願

福島縣士族

著作兼發行者
兼版權所有者

鈴木力

長崎縣長崎市岩原
千二百四十五番戶寄留

長崎縣平民

印刷者

境賢治

長崎縣長崎市
新町四番戶



版權登錄

發賣元

新街活版所

長崎市新町四番戶

賣 捌 書 林

長崎市引地町

鶴野麟五郎

全市酒屋町

虎與號

熊本市新町二丁目

長崎次郎

全市上通町五丁目

永井勝太

筑前博多

林斧介

滋賀縣大津中京町

島林南強堂

大坂備後町四丁目

梅原龜七

東京京橋區三十間堀

博文堂書店

東京神田錦町二丁目

學齡館

賣 捌 書 林

長崎市引地町 鶴野麟五郎

全市酒屋町 虎與號

熊本市新町二丁目 長崎次郎

全市上通町五丁目 永井勝太

筑前博多 林谷介

滋賀縣大津中京町 島林南強堂

大坂備後町四丁目 梅原龜七

東京京橋區三十間堀 博文堂書店

東京神田錦町二丁目 學齡館

和洋金物船具建築用具銅鐵鑄物類

極上等新形改良電口食物特別販賣

長崎市築町四十三番戶

登 柳谷登三郎商鋪



● 醫 療 諸 器 械 品
 ● 理 化 諸 器 械 品
 ● 工 業 諸 器 械 品
 ● 製 造 諸 器 械 品
 ● 用 藥 品 器 械 品

● 滋 養 品 數 種
 ● 洋 酒 類 種
 ● 諸 着 賣 藥 類 種
 ● 玩 弄 品 類 種
 ● 食 品 類 種
 ● 藥 草 類 種
 ● 粧 飾 品 數 種
 ● 類 類 類 類

長崎市築町渡邊通四ノ角
 外國貿易 三星堂 渡邊重吉
 廣 告

和蘭

此「和蘭」の滋養物を含み物質中最有効と稱せらるる「和蘭」の大豆より精製せる強壯餌として能く腸胃の消化を助け衰弱を恢復する事他の薬ぐさ薬の比に非ず且つ茶珈琲等より代用し得るを以て便利甚だ多しと弊社の夙に其精製に苦慮し一千八百十四年創設以來七十年を経て今を去る五十年前終に世界最大の精製工場を設置するの運至れり
 弊社の特製に念を入るしを以て代價の廉さを敢てせしめ物質の如く強て低廉せされど其精製最良の妙餌たるは歐洲全土の信認する處にして屏も埃利亞女帝の御朝御膳必す此「和蘭」を服用し玉ひ過般前御ありし獨乙先帝ラレテ此「和蘭」は三世御隊病の時諸名醫病時に見識し治療の方針を就て各自意見を異にしたるより聞はらず特製社製造する處の「和蘭」のみを皆之を賞用し陛下の其臨終の際に至るまで連日意りなく服用せられたり而して同帝をして彼重病中に永く其命を保続せしめたるは此「和蘭」の功なりと云ふ又一千八百五十一年以來各國博覽會に於て和蘭「和蘭」の優等賞の大約弊社の占有する所と認められり
 和蘭國「和蘭」の優等賞の大約弊社の占有する所と認められり

○特約賣捌所

長崎市鐵橋通築町角
 渡邊重吉



かすてら

謹告四方各位

弊舗多年菓子業相営み居候處幸よ諸君子の御引立を辱ふし候中よも拍亭
羅の同業者の數多きに先づ山の口のごと御指し被下候仕合難有奉深謝候
從て彌々製造に念入れ風味專一に勉強可仕候間倍々御愛顧被成下度次

砂糖漬

長崎州其他種

と共に御遣ひ酌御みさか四時遠近の御用に御高需の程幾重よも奉祈上候

長崎市船大工町山ノ口

和菓子製造本舗 福砂屋大輔

向々ビスケット滋養菓子日本蒸菓子一切不限多少風味御試の程幸希望候也

和洋小間物 流行の率先
和洋書籍 智識の先導
新聞雜誌
右各種取揃へ諸君の高需に應じ罷
在候間幾久敷御愛顧之程奉希上候

長崎市酒屋町

虎與號商店

大波戸勸工場内

出張店

本石灰町勸商場内

出張店

●神功膏功能書

大貝金貳錢
小貝金壹錢

今度上願長官許無類の奇膏を以めぬる功配左の如し

- 癰疔 ○筋骨痛 ○便毒 ○痔の痛
- 胎毒 ○田虫類 ○下疳 ○皮膚瘡
- 楊梅瘡 ○皮疔氣 ○疥癬 ○や
- け ○膿瘡 ○切疔打疔 ○頭瘡
- り ○天猫鼠喰付たる用ゆ
- 肝のりせれ ○指先(けい)の



健壽堂 竹谷藤吉監製

右の膏はかたさゆき火さず厚さ細さのばあ
痛所へ用ゆべしなるだけ油のよさも食用すべからず
調製元發賣所 長崎市 本通八拾四番戸
外 鍋釜類其他農具工器具一切商仕候間何れも格別の御用向奉希上候也

大日本製藥會社製造藥品

大阪製藥會社製造藥品

醫療理化學職工用藥品及器械

外國貿易藥種商 長崎市材木町立見屋車
特許藥用阿片賣捌所 蒲池徳太郎

諸大家有名賣藥及滋養品種々

繪具染草種々一飲食物玩弄品着色料

内外製造洋酒類

支那日本貿易商會廣告

當店事二十餘年來本店ヲ米國紐約ニ支店
ヲ橫濱神戸長崎上海及ヒ英京倫敦ニ開設
シ尙又歐米各地ハ素ヨリ東洋樞要ノ諸港
ニハ夫々引合店ヲ定置シ手弘ク直輸出入
商業ニ從事致シ來リ候處更ニ皆様ノ御便
利ヲ計リ各種ノ物品多少ニ不拘御注文次
第少許ノ手数料申受ケ電信或ハ郵便ヲ以
テ迅速取寄方實意ニ取扱候間何卒陸續御
注文ノ程冀望仕候

明治二十三年二月
長崎港大浦四番
支那日本貿易商會
敬白

支那日本貿易商會廣告

當店事二十餘年來本店ヲ米國紐約ニ支店
ヲ橫濱神戸長崎上海及ヒ英京倫敦ニ開設
シ尙又歐米各地ハ素ヨリ東洋樞要ノ諸港
ニハ夫々引合店ヲ定置シ手弘ク直輸出入
商業ニ從事致シ來リ候處更ニ皆様ノ御便
利ヲ計リ各種ノ物品多少ニ不拘御注文次
第少許ノ手数料申受ケ電信或ハ郵便ヲ以
テ迅速取寄方實意ニ取扱候間何卒陸續御
注文ノ程冀望仕候

明治二十三年二月
長崎港大浦四番

支那日本貿易商會
敬白

製造品發賣廣告

一凍氷

天然氷ハ雜種抱合間ニ毒ヲ含ムノ恐アリ
 人造氷ハ凝素純潔醫學上有効無害ヲ證ス
 右ノ蒸氣機械を運用して精製仕リ非常の廉價を以て春夏秋冬間斷なく販賣仕候

ラ ム 子 詰 英國新發明 玉日大瓶十ナンス入
 ソーダ水 器入 小瓶五ナンス入

セルザー水 新舶來 サイホン瓶

右ノ尤も元質を精撰し京濱より於て二十餘年間此
 種の業務に従事せし熟練の技手を雇入れ製造致
 候間品質の善良なるハ勿論風味の清佳なる敢て
 他は譲らざる所なり

外ニシンヂヤ、シンヂヤエール、トチコ、カスベ
 ラ、等諸種の飲料品も御注文は應じ製造可仕候

一凍氷貯藏函 大小二種

一輕便アイスクリーム 製造器械

右製造發賣仕候間陸續御購求
 被成下度尙長崎市を除き他地
 方ニ於て取次大販賣御望の方
 向ハ御引合可仕候也

長崎港内 稻佐郷 長崎製氷會社
 長崎市西濱町長久橋詰 同販賣所

●高等尋常簡易各小學校參考良書●

森田專一氏編輯

●小學算術教授法 全一冊

正價 金三拾錢
 郵税 四錢

本書目錄◎第一章總論◎第二章算術ノ教授ニ要スル第一ノ心得◎算術ノ目的◎實物計方ノ
 切要◎數理ト算法トノ關係◎算法ト日用計算トノ差別◎計算法ノ種類◎第三章算術ノ教授
 ニ要スル第二ノ心得◎第四章算術教授上ノ時弊◎第五章實物計方ノ教授ニ關スル心得◎實
 物計方ニ於テ練習スベキ事項◎實物計方教授ノ順序◎實物計方ト筆算加法トノ間ノ練習事
 項◎第六章四法教授ノ順序◎加法教授ノ順序◎減法教授ノ順序◎乘法教授ノ順序◎除法教
 授ノ順序◎第七章度量衡貨幣◎度量衡貨幣ノ教授ニ要スル特別ノ心得◎度量衡貨幣教授ノ
 順序◎單名數ノ計算法教授ノ順序◎複名數ノ定進數ナルモノ、計算法◎複名數ノ不定進數
 ナルモノ、計算法◎雜法ノ計算法◎應用雜題◎第八章珠算教授法

本書ハ編者が多年職チ小學校師範學校中學校等ニ奉シ專ラ數學ヲ教授セシ實驗上ヨリ現今

ノ小學校ニ於ケル算術授業ノ方法ヲ考案シ以テ編著セラレシモノナレバ其小學校ノ參考良書タルハ論ヲ俟タズ苟モ其職ニアルノ人ハ必ズ一讀ヲ要ス可キノ珍書ナリ

●日本ニ於テ毛糸編法出版元祖●

北米合衆國ケルツマン氏編纂
日本國長崎池邊榮次郎氏譯

●**毛糸鉤編法** 全一冊 正價 金貳拾錢
入圖

本書ハ題ノ如ク鉤ヲ以テ毛糸ヲ編ム法ヲ懇切ニ譯サレシモノニシテ幸ニ世上ニ好評ヲ博シ出版以來已ニ二千部ヲ賣盡シ尙ホ亦再版ニ掛ラントス四方ノ貴女子一本ヲ購求シ其實地ニ付テ試ミラレソ事ナク

出版發賣所 長崎市引地町 鶴野書店

各學校教科用書并教育參考書
醫術專門書 ● 和漢洋書小說書
英和字書並ニ有名ナル諸雜誌

右取揃倍々盛大ニ賣捌候間舊ニ増シ御引立御注文被仰付度奉希望候

文部省出版甲部 支部 長崎市引地町 鶴野書店
圖書關西取扱所

各船主諸君ニ報告ス

● 火箭 ● 焰管 ● 轟彈 ● 號角

右諸品ハ日本形船五百石積以上西洋形船近遠航海ニ限ラズ是非規則上必備必要ノ品ナリ

發火信號器製造販賣所長崎引地町鶴野麟五郎

ノ小學校ニ於ケル算術授業ノ方法ヲ考案シ以テ編著セシモノナレバ其小學校ノ參考良書タルハ論ヲ俟タズ苟モ其職ニアルノ人ハ必ズ一讀ヲ要ス可キノ珍書ナリ

●日本ニ於テ毛糸編法出版元祖●

北米合衆國ケルツマン氏編纂
日本國長崎池邊榮次郎氏譯

●入圖毛糸鉤編法 全一冊 正價 金貳拾錢
郵稅 貳錢

本書ハ題ノ如ク鉤ヲ以テ毛糸ヲ編ム法ヲ懇切ニ譯サレシモノニシテ幸ニ世上ニ好評ヲ博シ出版以來已ニ二千部ヲ賣盡シ尙ホ亦再版ニ掛ラントス四方ノ貴女子一本ヲ購求シ其實地ニ付テ試ミラレノ事ヲ乞フ

出版發賣所 長崎市引地町 鶴野書店

各學校教科用書并教育參考書
醫術專門書 ● 和漢洋書小說書
英和字書並ニ有名ナル諸雜誌
右取揃倍々盛大ニ賣捌候間舊ニ増シ御引立御注文被仰付度奉希望候
文部省出版甲部 支部 長崎市引地町 鶴野書店
圖書關西取扱所

各船主諸君ニ報告ス

● 火箭 ● 焰管 ● 轟彈 ● 號角

右諸品ハ日本形船五百石積以上西洋形船近遠航海ニ限ラズ是非規則上必備必要ノ品ナリ

發火信號器製造販賣所 長崎市引地町 鶴野麟五郎

道の尾温泉

〔長崎市より僅か一里半氣清く望み佳よ近郷の別天地美酒あり佳肴あり長崎近傍唯一の好遊山場〕

十四

弊舎多年温泉業相營み居候處幸よ諸君子の御愛顧を辱ふし日
増し繁榮仕り候段難有奉深謝候從て是迄心中秘し置候
大遊園設立の計畫此頃漸く其緒に就き乃ち庭園續きの一山四
万坪餘の箇所を手よ入れ申候山の形勢ハ眺望よ富み雅趣多
長崎港内諸船碇泊の状まで手に取る如く相見へ候且つ樹木の
森立と謂ひ空氣の清潔と申し成就の上ハ近縣に并び無き遊山
地と相成るべき心得候
右遊園も諸君子の御賛成を得て追々土工よ着手致すべく候得
ハ御運動旁舊よ倍し御來遊被成下度席を拂ひ湯を清めて伏て
奉待上候以上

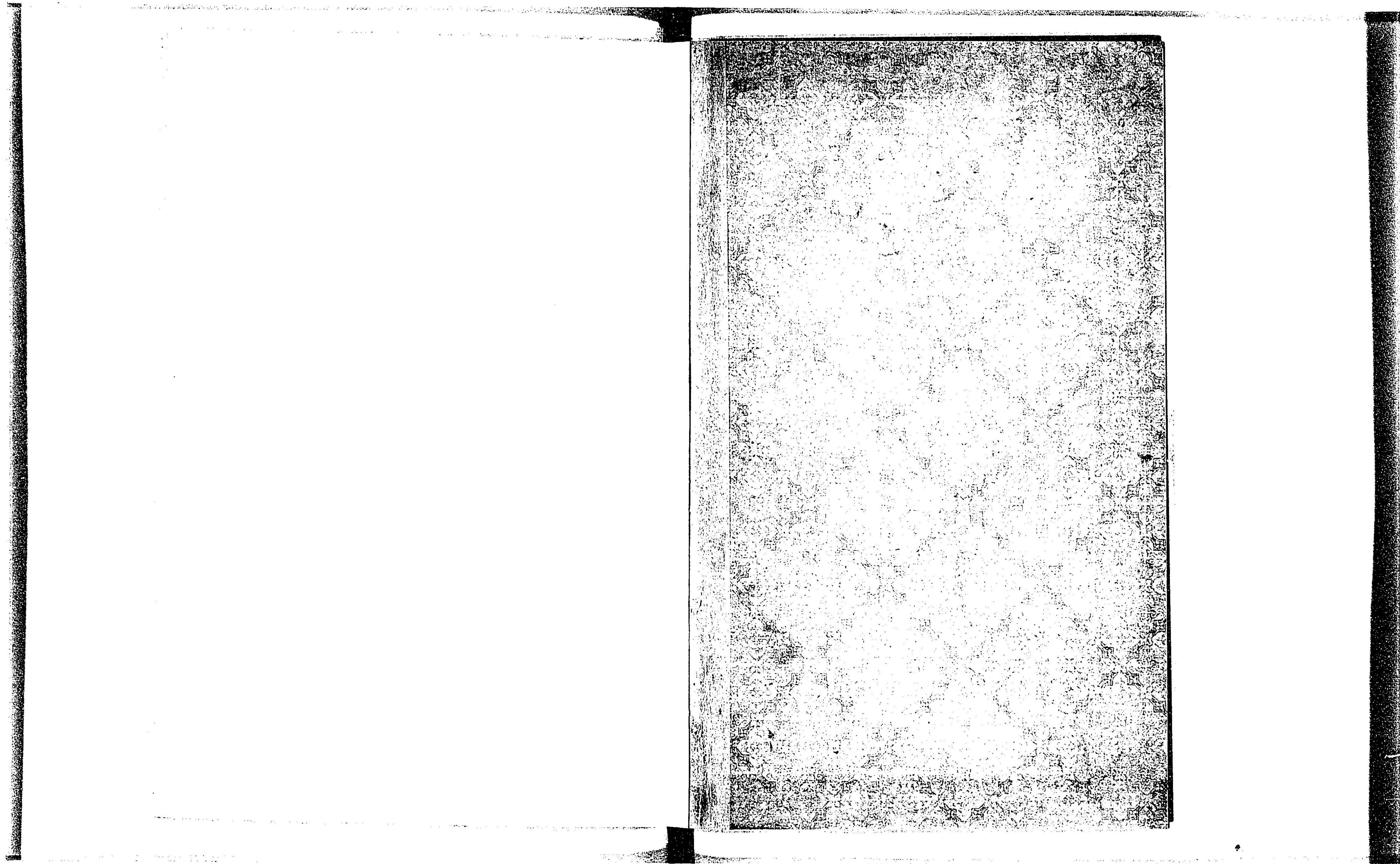
明治廿三年二月下旬

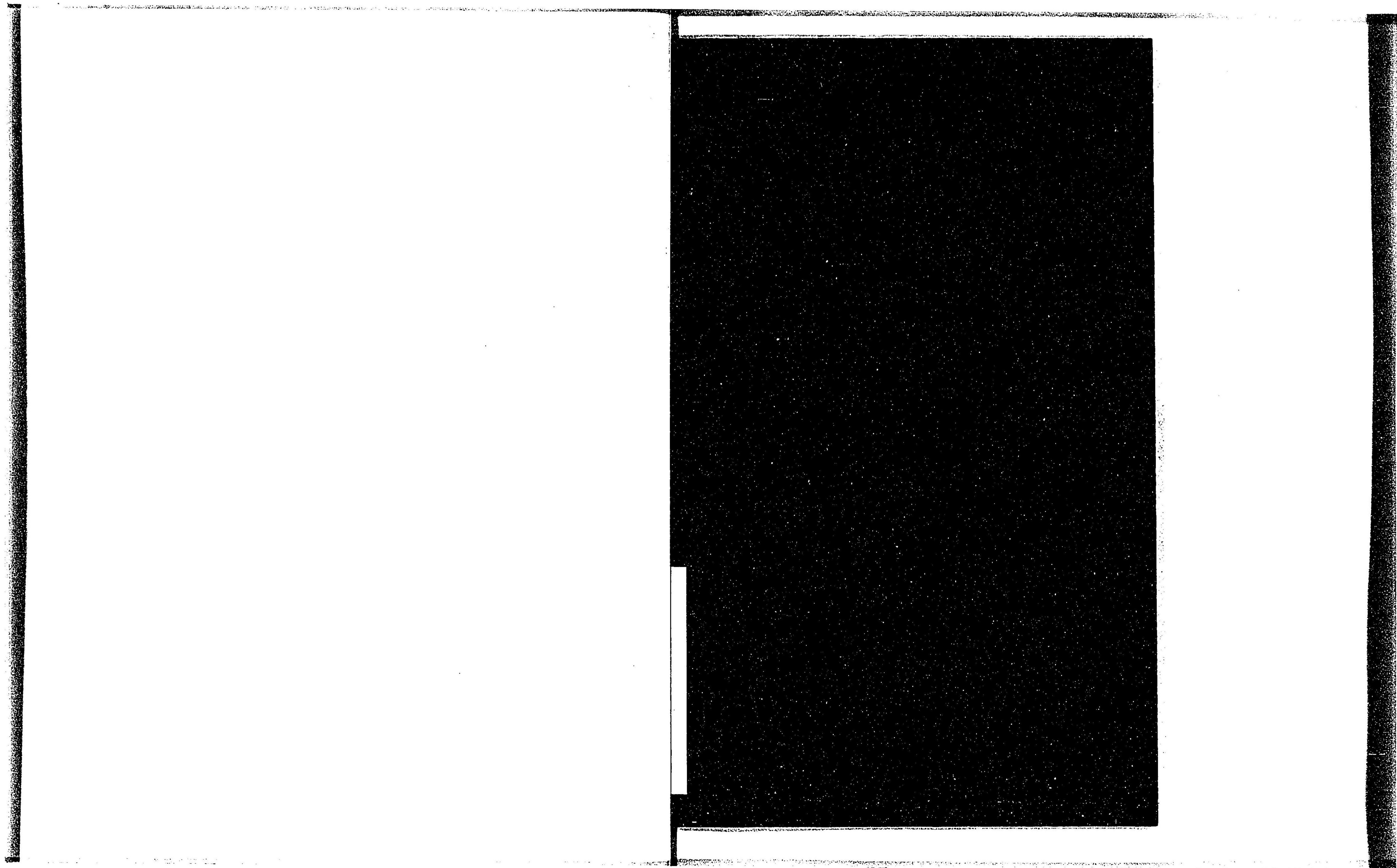
酒井屋 古田 吉平

道の尾温泉

〔閑雅ある田舎景色を見純潔なる山氣を吸ひ清醇なる温泉よ浴んと欲するの諸士ハ必ず弊舎を訪ひ玉へ〕







特 20

182

新 長崎土産

国立国会図書館

026268-000-2

特20-182

長崎土産(新々)

鈴木 力/著

M23

ADC-4024

